
畠辺ろにかは生きることにした

練炭

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

睨辺ろにかは生きることにした

【Nコード】

N5380W

【作者名】

練炭

【あらすじ】

とある少女は青年と出会った。とある睨辺ろにかはとある霧江五樹と出会った。それが始まり。それが終わり。何気無い対話から端を発した些細な現象は、次第に宇宙を呑み込む揺らぎへと振動していく。次第に自分の周りが何もかも巻き込まれていく中で、青年は何を思うのか。収束に向かって加速していく世界で生きたり死んだりする人々の物語。

その1 独房

独房 11/10 火曜

「君は毎日一人で帰っているね」

大学を出て数分経ったところで、ぼくはその声によって歩を止めた。

振り返ると、見慣れない制服を着た女の子がいた。

真っ黒の髪。身長ほどある髪。前髪は眉の下辺りで切り揃えられている。

「……ぼくの隣に友人らしき人間が見えるのか？」

「結構な言い分だ」

わけが分からない。

火曜日の午後四時五十分。

空は半分ほど雲が覆われていた。

「退屈だったからね。つい声をかけてしまったんだ。もしかして急ぎかい？ ならば無理に引き止めようとはしないのだが」

「引きとめるための第一声がそれとは、君は第一印象とか気にしない人なのか？」

「ふむ、ならば君は第一印象だけで人の全てを決めてしまうような人なのかな」

「そこまでは言っていない」

「しかし私にはそう聞こえてしまった」

なかなかへ理屈をこねる娘である。

ぼくが顔を歪めせると、女の子は対照的に顔を綻ばせた。

「だが、私にとっての君の第一印象はまずまずだ。悪くない」

「何様だ」

「お子様」

「……………」

今更そんな言い回し、小学生でも使わないぞ。

見た目確かに中学生から高校生といったところだろうか。ギリギリお子様と言われても領けないことはない。

「ところで私の趣味は気分が沈んでそんな人間に声をかけることだ」

「……嫌がらせが趣味なのか？」

「いやいやとんでもない。自分が嫌なことは他人にはしない、って親が先生に教わらなかったのかな？」

「……………なるほど」

女の子はそう言うばかりの顔を見ると、笑った。

それは、笑みだった。

目を薄く閉じて、口の端を若干吊り上げて。

日向ぼつこで気持ちよさそうに眠る猫のように。

「君はいつも退屈してそんな顔をしている。こう言えばどうだい？」

「……そう言う君はいつも疑問を抱えてそんな顔をしている」

「素晴らしい。まるで小さな旋律のようだ」

不思議な雰囲気を纏う女の子。

制服を着ているから、少なくとも大学生ではないだろう。

「こうしている間にも疑問は増え続けていく。他の人間は何をしているんだろう、と俄に思い立つ。世界は広がりを持っているが、人間は収斂に向けてしか存在たりえない」

女の子は演説するようにして口を動かし続ける。

「気になるかい？」

「……何がだ？」

だがぼくの疑問を余所に、女の子は「ならば」と告げて、

「すぐにまた会おう」

女の子は、踵を返して路地へと消えた。

ぼくは追い掛けなかった。

女の子は言った。

「すぐにまた会おう」と。

ならばすぐにまた会おうのだろう。

ぼくは立ち止まる前と同じ歩調で坂道を下り始めた。

その2 灰色

灰色 11 / 11 水曜

ふとそんな気がしたので、振り返ると昨日の女の子が立っていた。

「おや、まだ声を掛けた覚えはないのだけれど」

「そんな気がしたからだよ」

女の子は少し思案する仕草を見せた。

「そんな気がしたから……うん、悪くない答えだ。シンプルでいて明瞭。納得に足る答えだ」

女の子は数回頷いた。

今日は晴れている。青い秋空が寒々しい。日が落ちるまでは、まだ時間がある。

「今日もやはり君は楽しくなさそうな顔をしているね。明日にでも地球が滅ばないかと考えているようだよ」

「それは違うね」ぼくは反論した。「今この瞬間にでも滅んでしまえと思っている」

「心配しなくても、この世界は慢性的に滅びに向かって行ってるよ」

「そんな抽象的な話は不毛だと思わないか？」

「いや……………そうだな。そうだ。君の言う通り、そろそろ文明が滅んでも良い頃合いだな。一旦リセットして猿からやり直すべきだ」
「同感だ」

ぼくは本気でそう思っている。他の人間にこんなことを言つと馬鹿にされるか無視されるだけだろう。

その中で彼女は、ぼくと同じように思っていると感じた。
彼女もまた、本気でそう思っているのだ。

「『気になる』ことは病気だ。精神的疾患だ。人間はただ生きてから死ぬまでプログラムされていることだけをこなせばいいだけなことに、誰も気付かないだけだ」

「難しすぎて、ぼくには分からないな」

「嘘をつけ」彼女は即答した。「君は分かる筈だ。分かる筈の側だ。生きているか生かされているかの違いも分からないような愚鈍で蒙昧な輩とは違う。だろう？」

「同意を求められてもな」

「君が同意しようが同意しまいが関係はない。そうならば声を掛けた私が馬鹿みたいじゃないか」

「なかなか暴論を正論のように吐くね」

だが僕は彼女を馬鹿にする気はなかった。話を聞くのに退屈しない人間は、もしかすると彼女が初めてかもしれない。

それは旋律だった。ぼくの心に抵抗なく、するりと感じ入る旋律。

「仮に君が馬鹿だったとしたら、今君が言った事はただの与太者の世迷い事となるわけだ」

「いんや、心配しなくて結構さ。こうして会話が続けている以上、君も同類さ。分かる人にしか分からない会話なんて、甘美な響きだろっ?」

「だが少数派はいつも淘汰される」

「難儀な世界だ。私もそろそろ退屈を見つけるとしようか。君の気分を知ってみるのも悪くない」

「退屈なんて知らない方がいいよ。うつかりすると、いつもこの世からどうやったら完全に消失出来るかなんてばかり考えてる」

「レディオヘッドか。How To Disappear Completely...それも結構。今度一緒に考えようじゃないか」

前方から車のクラクションが鳴った。道のと真ん中にいた僕は、すぐさま道脇に退いた。

女の子の方を見る。

もう彼女の姿はなかった。

その3 散漫

散漫 11 / 12 木曜

「おや、君も煙草を吸うのかい？」

大学を出て吸い始めた煙草の長さが半分程になったところで、女の子が声を掛けてきた。

「ああ、もう二十歳だからね。そりゃ吸う奴は吸うさ」

「しかしこれからどんどん値段が高くなっていくようだよ。諸外国のように税金を良いように使ってくればいいのだが、この国にそんなことを求めるのは酷かな」

「確かに……って君、さつき『君“も”煙草を吸うのかい』って言わなかったか？」

女の子は少し驚き、若干口先を尖らせ、その後僅かに目尻を下げた。

よく分らないが、感情表現が豊かな娘だと思った。

「そうさ。そもそも煙草を吸うこと自体は犯罪じゃない。それによって公衆の景観が損なわれることが犯罪なのさ。ところで火を貰えるかな。ちようと手持ちのジッポウのオイルが切らしていてね」

そう言っただけで女の子は薄手のコートのポケットから煙草の箱を一つ取り出した。今日の女の子は私服のようで、コートの下には無地のセーター、そしてホットパンツという出で立ちだった。どうでもい

いのだが、季節に関係無く女の子がやたら足を出したがるのはもはや生物としての習性なのだろうか。

その発言は暗に自分が未成年であると暴露していたが、ぼくは特に文句を言うわけでもなく、注意するわけでもなく、ライターを取り出して女の子に近付き、煙草を啜える彼女の口元で火を付けた。

「ふう……やはり煙草はいいものだね。未成年に喫煙の禁止を促すなんて、政府の陰謀かと思えるよ」

「まあ言われてみれば、十代前半の児童がその辺で煙草吸いまくってたたら、公共の景観的には最悪だろうな」

「今や未成年の喫煙は不良の代名詞のようになってるからね。煙草が人を不良にするのではなく、不良が単に煙草を吸ってるだけだと言っのに」

「君のへ理屈は聞いていて心地良いな」

「なに、ただの真実だよ」

紫煙を燻らせる女の子は、なんだかそれだけ様になっていた。

近くに立ってみて、改めて女の子が小柄ということに気付く。ギリギリぼくの肩まで身長があるかどうかというくらいだ。

なのに、ぼくより大人びた風に見える彼女を間近にして、ぼくは一瞬だけ胸が高鳴った。

特に他意があつたわけではない。

単に、彼女が魅力的な女性であつたことに気付いただけであつた。小指の半分程の短さになつた煙草を携帯灰皿に入れ、ぼくも二本目の煙草を啜えた。

「そら」

「ん？」

いつも間にか女の子はぼくの手からライターを引っ手繰っており、それをぼくの口元へと差し出した。

ぼくは少し前屈みになり、火を付けてもらう。

白い煙が棚引き、肌寒い空気の中に溶けていく。

こういう一服も、悪くはなかった。

その4 虚無

虚無 11 / 13 金曜

「私には我慢できないものが三つある。超音波のような幼児の泣き声と、本を大切にしない奴と、ナスビだ」

「……何故そこでナスビなんだ？」

「あんな見た目も味も食感も本能的に拒否反応が起こる悪夢のような物体を、私は野菜とみなすことが出来ない。あれは食物として致命的な欠陥を負っている」

「じゃあ麻婆茄子食べれないのか。あれ美味しいのに」

「いや、麻婆茄子は食べれる」

「……………」

刻んだピーマンをハンバーグの中に混ぜたら食べれました、みたいな感じなのだろうか。……いや、あれはあれで紛れも無くナスビだろう。

ちよつと理解出来なかった。

だが彼女を理解出来ないのは今に始まったことではない。恐らくこの先もずっとこうなのだろう。

「嫌悪感と言うのには実に人間的な感情だ。まあ感情自体が人間独特のものなのだが」

「ぼくは嫌悪感と言う感情を嫌悪するけどね」

「ふむ……矛盾を孕んでいるが、至極もつともな言い分だ。しかし人間には欠かすことの出来ない感情でもある」

冷たく、強い風が吹き抜けた。

女の子は足が寒くないのだろうか、と思った。

今日も今日とて女の子は膝上数センチのスカートを穿いている。ちなみにスカートは捲れなかった。

「実はさっき挙げた三つ以外にも私は我慢出来ないものがある」

「だろうね」

彼女は好きなものより嫌いなものの方が圧倒的に多そうだ。

「何か分かるかな？」

「……ぼくなら、強いて挙げるとすれば『自分自身』かな」

「素晴らしい」

女の子は感嘆の声を上げた。

「その通り、私も最も嫌悪するものは『自分』だ。なかなか気が合うね、君」

「じゃあ似た者同士のぼく達は実は互いが嫌いだってことなのかな」

「そんなことはないさ。私が保証する。私は君じゃない。私は君に

似ているが、『私』は『君』ではない」

女の子は不敵な笑みを浮かべる。

言い方によつては拒絶されたように聞こえる言葉だが、それは彼女がぼくを受け入れたことに他ならないことに気付くのに時間は全くいらなかった。

また、『ぼく』も『君』ではないのだ。

「好きと嫌いは紙一重とはよく言うものだね」

「別にぼくは君のことが好きじゃないけどね」

「おや、フラれてしまったようだ」

「告白したところでOKしないだろ」

「それはどうかな」

これだから女は狡い。

だが、こういった会話は嫌いではない。

ぼくは意味の無い、当たり前障りの無い、他愛ない会話をするのが大好きなのだ。

その5 転調

転調 11/14 土曜

「意外だね。君がこんな洒落た喫茶店を知っているだなんて」

「大学生たる者、行きつけの喫茶店の一つや二つ持っていないくてどうする」

「そんなものなのか？」

「そんなもんだよ」

今日はすっかり忘れていた明後日提出のレポートを片付けるべく、大学の最寄りにあるとある喫茶店に来ていた。

少女は珍しく今日に限っていつもの場所で出会ってから、ぼくの後についてきた。

道中彼女は言った。

私は締め切りに追われる人間を見るのが大好きなんだ、と。
要するに悪趣味だということは理解出来た。

「ちなみに今私は手ぶらだ」

「見れば分かる」

「財布すら持ってきていないという意味だ」

「……言われなくても会計くらい持つ」

「紳士だね」

「男女差別を肯定するわけじゃないが、こういうシチュエーションにおいては男が奢るって決まってるんだよ。ましてや年上だしね」

「ふうむ……ところで差別を否定する人は差別を差別することになって、結局は差別を肯定してしまうことになってしまう矛盾について君はどう思う？」

「君、そんなぼくのレポートを完成させたくないのか？」

店のBGMがジムノペディの一番から二番へと移る。
ちようどぼくの心境も悲しげになり始めた。

「そんなこと言いながら、君、議論したくてうずうずしてる仕草がありありと感じられるよ」

もちろん少女には全てお見通しであつたわけだが。
もはやぼくに抵抗の余地はなかった。

「……………否定と差別は厳密には違う。否定は一方的で、差別は相互的だ」

「つまり？」

少女はコーヒーカップを口に運ぶ。
何気にブラックであつた。

「否定は何もかも打ち消すことだ。後には何も残らない。一方、差別はその後で反対の作用がかかる。結局『どちらか』に帰着する

ことを前提とした上で、差別という表現は成り立つ。君の言う差別は、偏見や先入観から生じる『差別』のことを言うのだろうか?」

「成程成程。つまり『差別を差別する』という表現自体がナンセンスだということだな」

「ああ。そろそろレポート再開していいか?」

「それ、提出しなかったらどうなるんだ?」

「二単位が蒸発する」

「君、大学って何年まで在学していいか知っているかい?」

「学費を君が出してくれるんなら、いくらでも討論しよう」

だが、ぼくは彼女にこの場から去って欲しいとは思わない。

彼女もまた、ぼくのその気持ちをどこかで汲み取っているのだろう。

ジムノペディが三楽章目に入る。

家に帰るのは、まだまだ先のことになりそうだった。

その6 汚泥

汚泥 11 / 15 - 16 日曜

今日は少女を見かけることはなかった。

なんてことはない。今日は日曜日なのだ。

用事が無い日に家を出るほど不毛なことはない。

時刻は午前零時を回った。

ぼくがシャープペンシルを走らす手を止めると、芯と紙の擦れる心地よい音が止まった。

外は静かだ。車道は遠いので車のエンジン音はしない。

部屋の中も静かだ。デジタル時計なので、神経に障るあの秒針の音もしない。秒針の音は時に雷の音より大きく聞こえる。

音がしない。

世界が止まる。

砂時計が零れきった後のような、安らかな静寂を感じる。

「……………」

しかし、静かなのはいけない。それが夜になると、尚更いけない。独りの時は、特に。特に。

無音が、うるさくなる。

ちくり、ちくり、と、それはやってくる。

音は人間が人間たる存在として在るために必要不可欠なファクタの一つだ。

人間は外部の情報を視覚が九十パーセント担っていると言うが、おそらく目が見えないより耳が聞こえない方が不自由だろう。

ここで言う『不自由』とは、動物的なものではなく、人間的なものである。

音、と言つかそれは、声、によって。

人間を人間たらしめるのは声に依るコミュニケーションに他ならない。

イマヌエル・カントは言った「目が見えないことは人と物を切り離す。耳が聞こえないことは人と人を切り離す」。

「……彼女なら何て言っかな」

少し想像してみたが、あの風を掴むような飄々とした性格を上手く想像することが出来ず、ぼくは結局黙った。

背凭れに寄り掛かり、天を仰ぐ。

それはとても物悲しい行為。

「雨でも降ればいいのに」

今日は晴れだった。

いや、今日も晴れなのだろう。

今日は晴れなのかもしれない。

雨が降ったのは、もう二週間も前だ。

変化が必要だった。それは掴むものではなく、訪れるものとして、でなければ、

「退屈じゃないか」

退屈。

それは彼女も言っていたような、気がする。

『退』廃的な『屈』折。

事実彼女は退廃的なほどに退廃的であり、屈折を屈折しきっていた。

「……………」

目を閉じる。

日付が変わった今日は月曜日で、大学があり、講義があり、今日がある。

つまりは、また、である。

r E P l a y t h e S t a g e .

そしてぼくは繰り返す。

「兄さん」

今日もまた、平常が訪れる。

それからぼくは妹とセックスして寝た。

その7 疼痛

疼痛 11 / 16 月曜

昼食はいつだって簡素に済ます。

「だからって育ち盛りの青年が素うどん一杯だけというのはどうなんだい？」

「そんなことより何で君が大学の学食にいるのか訊きたいんだが」

因みに彼女はAランチセットだった。この大学のAランチセットは魚定食と昔から決まっている。

量はそれなりに多い。多分ばくが頼んだら確実に昼休み中に食べ終わらないだろう。

よくてカツ丼単品が関の山である。

「今日はここで昼食を食べたい気分になったからだよ」

「なら仕方がない」

“『そう』いう気分になる”ことは説明がつかない。それはとても病的なものであり、ナンセンスなものだ。

だから『出来ない』。当然のことだった。

「それにしても友達いないんだね、君。——いやいや、友達がいないことは決して悪いことではない。寧ろ他人に微塵も依存しまいとするその強靱な精神力は称賛するに足るべきものだし、そもそも人間同士の関係が押し並べて希薄になってきているこの世界において

自分以外の誰かに自分を曝け出すなんて行為はもはや自分を殺していると言っても過言ではない。大体神が死んでいるのに友愛が生き残っているわけがないと思うんだが、そのところ君の意見を聞かせてほしいな」

「……まずうどんを完食させてくれ」

「分かった」

正直うどんではさえばくは手こずる。

ここの学食はそもそも元々の量が多いのだ。大盛券はあるのに小盛券はないので、ぼくはいつも苦勞している。ぼくの感覚で二人分までとはいかないが、少なくとも一・五人前はあるに違いない。

少女はというと、もう殆ど食べ終わっていた。

「それにしても、昼食を一人で食べているだけで友達がいないと帰結するのは、何とも短絡的な偏見思考だとは思わないのか？」

「でもないんだらう？」

「いない」

ぼくは水を飲み干した。

遠目でぼくらのことをチラチラ見る集団に気付く。

ぼくが『ここ』にいて、少女が『ここ』にいることがそんなに滑稽なのだろうか。

少女はいつもの制服だった。だからなのだろうか？

もちろんぼくは気付かないふりをする。

ぼくは気付いていながら気付かないふりをする行為に長けているのだ。

「一度酷い目に遭ったからね」

ぼくは喉元を過ぎてても熱さを決して忘れない。
それは冷たさも同様だ。

「それは良い判断だ。仏の顔も一度まで。この世は取り返しのつかない過ちに満ちていることを知らない人間が多すぎる」

「だろうね」

傷ついた人間は淘汰される。

「傷ついた人間は淘汰されるからね」

「その通り」

食堂の大きな天窓から柔らかな陽の光が差し込む。
今日は晴れだった。

その8 混濁

混濁 11 / 17 火曜

好きな色は白だ。

「意外だね」

「どうして」

「男子ってのは無闇矢鱈に黒が好きなものだと思っていたからさ」

「……誰にだってそういう時期はある」

特に十代中盤の時期に。

それは自然であり、工程であり、密かなものなのだ。もしかしたら赤が好きな人が多いかもしれない。だからってその人が『どうこう』だと言う筋合いは全くない。それこそぼくの好きな『ナンセンスなもの』だ。例えるなら、血液型占いと同程度には。

物事の裏を見れば、途端に視界は開ける。

因みにぼくは本当に白が好きだ。

単純に『無』が好きだと言ってもいいかもしれない。『無』が『白』だと誰が断言したわけでも証明したわけでもないけれど。

だからぼくはよくここに来て思案に耽る。

白に彩られたこの空間に。

外界とは隔てられたこの空間に。

ベンチは一つ。ぼくと少女は並んで座る。

「煙草あるかい？」

「メンソールでよければ」

「何でもいいよ。銘柄なんて副次的なものに過ぎない。私にとってはね」

「ぼくはマルボロのアイスプラストしか吸えないけどね」

「決まっている、ということはまたそれで幸せなことなのさ」

そう唄うように言って、少女は器用に、コーヒーカップを傾けるのと同じような手つきで（指つきで？）煙草を燻らせる。

「そう言えば私も好きな色は白だ。『色』と言うか、白という『存在感』が気に入っているのだけれど」

「ぼくは君こそが黒が好きだと思っていたよ」

「黒も好きだよ。正確には白黒が好きだ。私は対になるものも自然と好きになってしまうのさ」

「……君らしいね」

「そういう愛し方もあるんだよ」

……ぼくは考える。

今まで考えたことのなかったことを考える。

ぼくは枠に囚われている。

それは無自覚であり、ぼくはそれに気づいていない。

その思考も全て想像上の産物だ。

そして少女は――

「君は運が良いね」

「知ってる」

「だと思ったよ」

知っている。だからぼくはこうして少女と話している。

昔の哲学者は言った。「無知の知」と。知らぬことを知らぬのは罪だ。知らぬことを知っているのはそれだけで価値がある。

しかし、知らぬことは知らぬのだ。

過程ほど無意味なものはない。

無意味ほど無意味なものはない。

そうやってぼくは無理矢理生きてきた。少女に出会うまで。

「実は私も運が良かった」

「それも知ってる」

「だと思ったよ」

だからぼくは少女と一緒にいたいと思った。

その9 雑多

雑多 11 / 18 水曜

「本屋はいいね。知識に囲まれている実感はいかなる欲求にも替え
難い快樂だよ」

「確かに君は三大欲求より知識欲の方が強そうな顔をしているね」

駅前の本屋はそれなりに大きい。ぼくは常連だが、少女も常連な
のだろう。なんとなくそんな感じがした。

「それは言い過ぎだろう」

「そうかな」

「大体どんな顔だ、それは」

「そんな顔だよ」

だがそんな人は往々にしているものだ。少なくとも、ぼくが思っ
ている以上に。それが例えぼくの隣にいたって、何も不思議に思っ
ところはない。居るところに居ることに対して、説明を求めるべき
ではない。ぼくはぼくの隣のことだって分かりはしないのだ。ぼく
の隣も日本の裏側も、特筆すべき差異はない。

「それで？ 何の本を買いに来たんだ？」

「ケッチャムの『隣の家少女』」

「……………一緒に来たのがばく以外だったらドン引きだね」

「それにしても共通の趣味をやっと見つけた、みたいな顔をしているよ」

「……………お互い顔によく出るみたいだね」

「全く、難儀なものだ」

溜息を吐きつつも、そう言って少女は目を細め、くつくつと笑った。

あくまで静かに、見つけた何かを大切に包み込むような優しさで。

「そんな本ばかり読むのかい？」

「私がグロテスクで反社会的なテーマに惹かれるような人間だとも？」

少女は少し心外そうな口調でありながら、やはりどこか嬉しそうな笑みを湛えている。

ぼくの次の言葉に期待している。

それはぼくも同様だった。

「人はそういうのに惹かれる。この前拷問の歴史をコミカライズした本がとても売れてた。皆想像力を働かせるのが好きなんだよ、多分」

「確かに。殺人という事象を一つ取り上げても、それがただの通り魔であるケースと、スプリークラーであるケースと、劇場型殺人で

あるケース。人が殺され、それに付随する事象に人々は興味を示す。所詮他人が一人死んだところで心動かされる人はいないしね。皆やはり『刺激』が欲しいんだろう」

「『刺激』と言うか、『異常』だな」

「ふむ。言い得て妙だね。これだから人間の中で生きるのは止められない。もし鳥に生まれ変わったら一体何を期待して毎日を生きればいいのか分からないよ。鳥の世界では猟奇殺人なんて起きそうにないしね」

「どうだろうか。案外鳥は彼らの世界で、僕らの知らないところで猟奇殺人を起こしているかもしれない。」

「ぼくはやはり、まだ何も知らないことだらけだ。」

「えっと、この辺だな……………あつた」

少女は文庫の棚から目当ての本を取り出す。

「君は何も買わないのかい？」

「ちょっとこの前来た時在庫が無くてね。取り寄せてもらってある。昨日入荷の電話が来たから一緒にレジに行こうか」

「因みに何の本だい？」

「ジョン・ソールの『暗い森の少女』」

「悪くない」

そう言っ
て少女は
また嗤っ
た。
だ
け
ど、
ぼ
く
に
は
そ
の
嗤
い
が
心
地
よ
か
っ
た。

そのXX - ?

【独りガタリ、或いは虚空へ個喰うゝによつて】XX / XX

—— 偏見、つまりは偏つた見方とはよく言つたものだね。

その通り人間は偏見でしか物事を見れない。測れない。だがそれはマイナスイメージではない。人間特有の、ユニークな一面だ。人間である以上、偏見を持たずに日々を生きることが出来ない。だからこそ平等なんて嘘っぱちなわけだよ。

人間が我々の知る人間である限り、偏見はエントロピー的に増大する。偏見……言い方が悪ければ、推測、とも言おうか。多面から観測したことで人間は新たに未知なる道を見出すことが可能だ。この未知と道が同音であることは決して偶然ではない。

道はいつでも知られざる事象として我々の前、或いは横、若しくは下に構えている。果たして、今まで歩いてきたそれはどうだったのかな。

話を戻すと、人間を人間たらしめるものは何か、とここで問おう。一つに知能、と誰かが言う。だがそれは大きな勘違いであり、一番陥り易い人間ならではの欠点だ。そもそも人間が一番知能を持っているとは、彼らが観測したデータの中の結果でしかない。つまりは限界を勝手に決めた人間の驕りということだ。

一つに感情、と誰かが言う。確かに人間は感情豊かで、それ故理性を自覚している。成程エスに踊らされているようでは人間ではない。しかし究極的には、感情は後天的なものだ。それは知能とよく似ている。それらに先立つものの存在はあり得ない。喜怒哀楽、その対象をよく考えるんだ。

答えを言おう。それは単純明快であり、人間を人間たらしめるものは、ご存知人間自体でしかあり得ない。

これは種の問題だ。ある有名な言葉を借りるならば、『人間は人間として生まれるのではなく、人間になるのである』とも言えようか。人間に『成る』のだ。人間は認識するよりも早く、認識されることによってこの世に現れることが出来る。そしてそれは徹底的に不可逆的なものだ。

全ては超自然、つまり世界によって生かされている。自分達を主体的と思うのは間違いではないが、ある意味ではそれは本質からズレた思考経路だ。自分がどう思われているか、自覚しなかったことはないかね？

愚かなり人間。あらゆる知能、感情、自己を持っても、人間は『完成』アダム・カドモンになることは永劫無い。

緩慢な繰り返しに飼い殺され、それで善しとする救い様のない生き物。

ならばそんなことを考える頭がどうしてあるのか。
それを考えよ。

人間は一茎の葦でありながら宇宙である。
それに気付け。気付くことから、意味は始まる。
意味を見つけたならば、『それ』に至れ。

その10 振動

振動 11 / 19 木曜

「忘れっぽいとは美点だと思わないか？」

「何故だい？」

「おいおい疑問を疑問で返すなよ。君ともあろう者が」

「ぼくに期待するといつか酷いしっぺ返しを食らう時が来ると思うよ」

「君がそれを言うかい？」

「それもそうだ」

忘れる、という行為は主にマイナスイメージとして浸透している。それは日常生活において健忘とよく関連付けられるからだろう。健忘は疾患であり、大事なことを忘れると大変なことになるのは周知の事実である。実のところ、それは相対的な論に過ぎないのだが。

絶対的なことなど起こるはずがないのだ。

絶対的なことなど起こりようがないのだ。

人間が人間であり続ける限り。

電車がトンネルに突入する。

耳の奥から綿棒がゆっくりと這い出てきそうな感覚が、二三秒してから訪れる。

当たり前だが、それもまた相対的なそれに過ぎない。

「まあ話を元に戻すけど、これでも記憶力は良い方だね。忘れっぽいことがどういふことなのか分からないな」

「眼鏡を上にもずらして顔を洗って顔を拭いた後に『眼鏡眼鏡』って言うアレさ」

「そうテンプレート的行為は説話か寓話であると思うんだが」

「世界は広いよ？」

「そついうものかな」

「昨日ウチの兄がやってた」

「……………」

不幸にも、ぼくは今朝妹起こしに行ったら彼女が「もう食べれないむにやむにや」とか寝言でぼざいていたのを発見したのを思い出した。

ぼくは狼狽した。

ぼくはやり込められるのが苦手であり、論破されるのが苦手であり、後手に回るのがどうしたって苦手なのだ。

て言うかお兄さんがいたのか。……あまり想像したくない絵面ではある。そついうのは適役があるのだ。少女と少女のお兄さんには失礼だが、見た目十代中盤の彼女より年上の野郎が行っていいドジ行為では断じてない。

そんな風に思案するぼくを見て、少女は黙した嗤いを向ける。

車両が揺れる音に重なって、アナウンスが聞こえる。

目当ての駅は次に迫っていた。

「実は私は忘れっぽい」

「意味記憶の方が正常だったらどうかなるさ。エピソード記憶なんて実務的なことくらいにか使わないんだから」

「結構ドライだね」

「クールと言ってほしい」

嘘だ。

いつか「五樹君は残酷だね」と言われたことがある。

ぼくは納得はしなかったが否定もしなかった。

常にプラスマイナスゼロでありたいぼくにとって、冷たさも温かみも必要ではないしそもそも持つべきものではないのだ。

電車が徐行する。

電車が止まる。

ドアが開く。

「君が『そう』やりたいなら私は『ここ』にいるよ。尤も、どちらにせよ君次第だけれどね」

ぼくは少女に背を向け、振り返ることなく電車を後にした。

その11 順序

順序 11 / 20 金曜

テレビがある。

映し出されているのは殺人事件のニュースだ。

なんでも白昼堂々単独犯で無差別に四十二人殺したらしい。確かスプリークラーのギネス保持者はこの前八十人近く殺したテロ犯だったことを思い出し、これだけ殺してもまだ半分くらいなのか、と可笑しい感想を抱いた。

しかし戦時中にはその倍を一人で殺した人もいただろう。人間は観測と認識によってしか成り立たない。

「思うんだけどね、私には『物事』の順序の基準が分からない」

「ぼくはいきなり君が何を言い出したのかちょっと分からないね」

気にせず少女は続ける。

全くもって、変わり映えしないいつもの流れだった。

「人間の三大欲求の中に『生存欲』が入っていないのは何故だと思っ？」

「感情論みたいな形而上の事象は決定付けが難しいんだよ、多分。哲学者は口うるさい変人ばかりなのと同じじゃないか？」

「性欲だって一種の感情論じゃないのかな？」

「男だったら去勢すれば事足りそうな気がするけどね」

「……なかなか斬新だね」

「それでいて的確明瞭じゃないか？」

テレビのニュースは続く。

大学生が小学生に性的悪戯を働いて逮捕されたみたいだ。

「もし君に子供がいたら、性的悪戯についてどう説明しようか」

「……『物事には順序がある』ね……」

「おそらく頭を切り落とし、その上顔をめった刺しにして路上に放置したケースでも、世間は『その通り』に報道するだろう。だが、小学生が体の至る所を弄られた拳句レイプされたとしたら？ 殺人と性行為。子供に悪影響を与えるのは一体どっちなんだろうね」

「どっちもいずれ知ることだよ。人間はしばしば自分が理性的な生き物だと勘違いしている。それに——」

「それに？」

「被害者は男の子だ。それだけでまた違ってくる」

「確かに」

だから人の命は地球より重いだなんてとんでもない暴論であり、せいぜい21グラムが関の山だろう。尊厳などというものは自己を防衛するベールに過ぎず、暴力は自己を肯定する最も手っ取り早い方法だ。

世界はそう決定付けられている。

意味がないことも、ちゃんと『意味がない』意味があるのだ。

「結局のところ、人間は感情的な生き物だよ。何もかも『そうせざるを得ない』時に重い腰を上げる」

「でも今は情報化社会だからね。頭でっかちが多いったらなんの」

「耳年増ってヤツか」

「そうだね。知識だけあっても仕方がない」

「知識ねえ」

「君に朗報だが、それでも私は処女だ」

「嘘吐け」

「嘘だ」

それも嘘だろう。

「私は嘘は吐かないよ」

つまり少女は嘘しか吐かない。

嘘の嘘はやはり嘘になる。嘘の次に真実を言っても結局嘘でしかなく真実の真実も嘘である可能性は決して捨てきれない。

+ × + || - ?

——ノイズが、酷い。

「試してみるかい？」

ぼくはテレビを消した。

その12 雲散

雲散 11/21 土曜

土曜日。しかし大学はある。午前中までだが。

朝に少女に出会ったのは初めてだった。少女が通う学校は私立なのかもしれない。

少女は紺色のブレザーの上に学校指定であると思われるコートを羽織り、更に白色のマフラーまで装備しているが、相変わらずスカートの丈は膝上だった。因みにハイソックスなので、瑞々しい肌色が見えているだけで寒々しい。

全国の女子高生は（別に高校生に限らないが）冬季限定で男子に秘密裏に我慢大会でも開催しているのだろうか。

「今わけの分らないことを考えていただろう」

「わけの分かることを考えている時なんてないよ」

「哲学者って発狂死するイメージがあるんだが」

「単にぼくは思ったことを思ってるだけだ。哲学者なんかとは全然違う」

確かにニーチェは頭がおかしくなって死んだが、彼の思想からして自分がその中心に坐していたと考えると、その狂気も頷ける気がする。

影響する側にとって、その精神状況は想像に易くない。常に耳元で世界を滅びに向かわせる呪詛を唱えられ続けたら、誰だって発狂して戻ってこれなくなるだろう。

人は内的要因だけで十分死に至ることが出来るのだ。

「寒いね」

「ならスカートをもっと長くすればいい」

「それは愚問と言うものだよ。世の中には無数の秩序があるのさ」

「今日が寒いのも？」

「勿論」

そう言つて少女が吐いた息は白かった。

世界は年々寒くなつていつている。地球温暖化なんて誰が言い出したことかは知らないが、寒くなつていつていることには変わりなかった。

それもまた言い訳かもしれないのだけれど。

「今日も学校か」

「私立は大変なんだよ」

「でもどうせ半ドンなんだろう？」

「半ドン？」

「……………」

ぼくはカルチャーショックを感じた。

「天井の仲間じゃないからな」

「先手を打たなくても、そこまでお花畑な思考回路は持ち合わせていないよ。で？　どういう意味なんだい？」

「午前中で授業が終わることだよ。土曜日の意味と言つか、半分休日の意味ってところかな」

「……ドンってなんだい？」

「……………」

ぼくは勉強不足を痛感した。

人はいつだってそうだ。情報を共有し合い、取捨選択し、それゆえ必要以上の知識を持ち合わせようとしない。『それ』こそが本質だというのに。

本質はいつだって、道から逸れた所にある。

「直感なんだけど、君ってよく死語を用いたりしないかい？」

「死語って言葉自体が死語だろう。皆自分が先端であることを自他共に示したいだけだと思うけどね」

ぼくらは歩く。

少女と同じ制服を着た人がちらほら出てきた。生徒が女子しか見受けられないところから見ると、女子高なのだろうか。

ぼくはこの辺りの地形には疎い。

「じゃあぼくはこっちだ」

「私はこっちだ」

ぼくは少女に背を向ける。
数歩歩いて振り返る。

「……………」

空は曇天の様相を呈していた。

その13 幻想

幻想 11/22 日曜

朝から降り続いていた雨は昼過ぎには止み、ぼくは四時過ぎに本屋に向いた。

いつもの駅前の本屋ではなく、電車で二十分ほど揺られた先にある、都心部の巨大チェーン店の本屋だ。ぼくは基本的に本の発売日を事前に確認しない。『先に知る』ことは、生きていく上で最も愚かな行為の一つだ。ならばこうして生きるとは、一種の処世術でもあるのだ。

果たして今日は愛読している作者の新刊が出ていたので、それを買う。帰りの電車の中でそれを読む。電車の中は非常に良く出来た読書空間だ。ぼくは電車を用いた長旅に際して必ず文庫本を数冊携帯する。どちらかというとぼくは本を早く読む方だ。そしてぼくはそれ以外の暇潰しの方法を知らない。

帰ると妹が居た。

少し釣り目でありながら、人懐っこそうな笑みを絶やさない。外では知らないが、家の中ではだらしなく今日も明らかに身に余るセーター一枚だけ着ている。そして、肩にかかる程度の白髪。

ぼくの妹。

霧江常夜。五つ離れた妹だ。

「ご飯にする？」

「ああ」

「お風呂にする？」

「だから」飯」

「そ・れ・と・も」

「飯」

「はい」

リビングに行くと、既に夕飯の準備が整っていた。
ぼくと常夜は席につき、どちらともなく食べ始める。

「お風呂って言ったらどうするつもりだったんだ」

「晩ご飯の前にお風呂入ったことなんてないくせに」

「そうだったか？」

「自分に限って自分自身のことはなーんにも知らないもんだよ」

常夜は目を細める。まるで蝋燭の炎が不意に揺らめくように。普段から猫のような目をしているが、更にその双眸は鋭くなる。たまに猫そのものに見られていると勘違いする。視線を感じると、そこには猫がいるのだ。

常夜は囚われている。それは百も承知であり、その根源は誰でもないぼくなのだ。

「ただどぼくは焦らない。」

『何事にも定まった時期があり、全ての営みには時がある』のだ。

「兄さん」

「何」

「好き」

「そうか」

空気であり、記憶であり、旋律——そう、忘れがちでありながら『そば』にいるのが旋律。ぼく達はこの流れの中で生きている。やはり、人は音の中で生きている。

「そう言えば兄さん、この頃一緒にいる女の子って誰？」

「……知ってるだろ」

常夜が訊くことはいつも自分の知っていることだ。

そしてつい先日気付いたことだが、あの少女と常夜の学校の制服は同じだった。

「クラスメイトなのか？」

「ううん。学年は同じだけどね。不思議な子だから、私だけじゃなくて他の子もあんまり近寄らないんだけど。でもこの頃男の人と一緒にいる目撃情報がいっぱい出てきて……ンククッ、兄さん有名人だよ？」

「マジか」

変装道具は眼鏡と帽子で十分だろうか。

「でも」

常夜は続ける。

「気をつけることに越したことはないんだよ？」

常夜は食器を持って、キッチンへと移動した。
ぼくは――

その14 耽溺

耽溺 11/23 月曜

「止まない……」

朝の天気予報では午前も午後も降水確率はゼロパーセントだった。ならばこれは夕立というもののだろう。家を出る時雲一つないのにわざわざ折り畳み傘を持って出る杞憂な性格はしていないので、ぼくは駅まで歩いてあと十分程度のところで、あまりの雨脚に負けて戦略的逗留を計ることにした。

最悪雨を被りながら駅へ向かうことは出来るが、そうになると全身ずぶ濡れのまま電車に乗ることになる。そして今は帰宅ラッシュの時間だ。ぼくは極力人に迷惑をかけない生き方を心がけている。

「奇遇だね」

「うん？」

そこには傘を差した少女が立っていた。

「何してるんだい？」

「雨宿りだよ。そっちこそ、こんな時間まで授業があるのか？」

時刻は午後七時。ぼくはすっかり忘れていた中間レポートを図書館で仕上げていたので、こんな時間になってしまったのだが。『忘れっぽい』性格と『つい忘れてしまう』性格は全然違う。

「こつちも色々あるんだよ」

「成程」

「私も雨が好きだが、限度というものがあるね」

「全くだ」

空は未だに頭が痛くなるような灰色が散りばめられており、それでいてそれらは決して拡散することはない。

雨雲もそういうことを思っているのだ。

「行かないのか？」

「たまには雨宿りも悪くないと思ってね」

「確かに」

雨宿りは神秘的だ。そこに意図せず介入する『偶然』にぼくはど
うしようもなく惹かれる。或いは実のところ運が良いのだ。少なく
とも僕にとっては。そして恐らく、彼女にとっても。

まるで夏の日に降る雪。冬の日に差し込む暑い西日。

春の日に眺める紅葉。秋の日に散りゆく桜。

「止まない雨はないし、覚めない夢もなく、明けない夜はないと言
うけれど、止まない雨も覚めない夢も明けない夜もあると思わない
か？」

「可能性はね」

人間は知り尽くしていない。

『そうでないこと』なんて誰も断言できない。
だからぼくは『旋律』に身を委ねる。

「まあ止まない雨は流石に三日あたりで辟易しそうだけど」

「でも三日も晴れっぱなしだと、ぼくは退屈だけどね」

「その程度でかい？」

「その程度だからこそだよ」

「変わってるね」

「……………」

君がそれを言うか、と反論しそうになったが何だか言ったら負けな気がしたので踏み止まった。

「止まないなあ」

「……………」

「入れてあげてもいいんだよ？」

「頼む」

「君結構口下手だね」

「放っておいてくれ」

「こんな面白いことをかい？」

ぼくは黙った。

からかわれることには慣れていない。

雨脚が一層強まってきた。

その15 流水

流水 11/24 火曜

『全てがおかしくなっていくのに、彼女にはなにもできることがなくて、自分の無力さを感じざるを得なかったからだ』

——『ベロニカは死ぬことにした』パウロ・コエーリヨ

「何の本だい？」

「愛読書というヤツさ。人間、最低でも一冊はそういう本を持つべきだと思っただけど」

「同意だね」

本には二種類ある。一度しか読まない本と、何度も何度も読む本だ。それは音楽にも寸分変わらず同じことが言える。何事にも物事には二種類しかない。

それはとても大切なことだ。さながら呼吸するのと同程度には。生きることとはそういうことなのだから。

「それで？ 何を読んでるんだい？」

「『私』さ」

少女が顔を上げ、漆黒の硝子を思わせる瞳をぼくに向けた。それは今までぼくに向けられた視線のどれとも違って、旧知に向けられた視線で初見に向けられた視線でもあった。

「何だって？」

「これは『私』なんだ」

ぼくは発言の続きを待ったが、少女は再び書籍に目を落とし、そのまま彫像のように動かなくなった。そう、確かにその様子は彫像であり、意味深であり、静謐だった。

少女がそう思うのなら仕方がなく、ぼくは煙草を取り出して一本吸った。白に白が重なり、より濃い白になる。

時間は確かに流れているのだろう。しかし空間は静止しており、前にも後ろには行かず、ただただ留まっていた。

白も黒も『止』を連想するが、そのイメージは寧ろ逆だ。前者が『静止』で後者が『停止』である。

「……人が自殺する理由って何だろうね」

唐突に、少女が口を開いた。この場にはぼくと少女しかない。その問いはぼくに向けられたものなのだろうか。

その声もまた、ぼくが初めて聞く種類のものだった。

「自殺、か」

「そう。自殺、だ」

「そのテーマだけで一晩語り明かせるな」

「だけど明けない夜もある」

「その通り」

だからぼくは答える。

「人は無力を感じた時死にたくなる。そうプログラムされてると思ってる。自分ではどうしようもなくなくなった時、人は最終的に何もかもかなぐり捨てて何かに縋りたくなる。それが『死』だ」

「無力。何だか綺麗な言葉だね。透明感もある。とても、美しい」

薄く笑みのようなものを湛えながら、少女は灰皿にあつたぼくの吸い掛けの煙草を手に取り、躊躇いもなく吸い始めた。

「それにしても自殺だなんて、いきなり穏やかなじゃない話題だね」

「何言ってるんだ」

そう言う少女は、本当に腑に落ちない表情を浮かべた。まるで、何故生は死ではないのか質問されたかのように。

「自殺ほど穏やかなものはないじゃないか」

ぼくは二度瞬きをし、一度息を吐き、頷いた。
そして今日もまた、穏やかだった。

その16 前々

《前々》 11 / 25 水曜

突如として訪れるものは、突如として訪れるものでしかない。偶然とは必然の範疇にある事象であり、物事は起こるべくして起こるしかないのだ。

だからぼくは驚かないし慌てもしない。考えるだけなら誰でも出来る。

ハプニングは降って湧いてくるものではなく、蜃気楼のような不透明さですぐ傍に佇んでいるものだ。

当人の望む望まずに関わらず。

「……………」

「どうしたんだい？」

「いや、別に……………」

視線は本当に『突き刺さる』ものであるとぼくは知っている。あながち視線で人が殺せるという比喻は物理的に見ても間違っていないだろう。

振り返ると、そこには誰もいない。隣には少女がいる。その隣にはぼくがいる。当たり前だ。こうして並んで歩いているのだから。

おかしいことなど何もない。

「よく皆『別に』と言うけれど、アレは何なのかな。日本人は語尾を省略するくらいがあるから日本語が難しい言葉だと勘違いされる」

「實際難しいだろう。主語を省略するのが当たり前の時点で」

「多分日本人は推測するのが好きなんだろうね。いや、そうあるべくようにされてきた、とでも言おうか。とにかく昔から回りくどいことが美点とされてきたから、俳句や短歌みたいな文化が出来上がったんだろうよ」

「寧ろ逆じゃないか？」

「だから全てを自己解釈に委ねてきたのさ。結果、個人の数だけ世界が出来上がってしまった。世界世界世界世界。耽美でありながら諸刃の剣だ。限界も近いんだと思うよ、私は」

少女がそう言うのならそうなのだろう。

……ぼくは想像する。ベニヤ板の皮が剥がれ落ちていくように、風化された石塀が零れ落ちていくように、耐え切れなくなって崩れ落ちていく様を。

それは日曜日の朝であり、午前三時の信号機であり、木漏れ日とそよ風が差し込むカーテンだ。

または止まった扇風機であり、雨上がりの雲の隙間であり、靄の中で見る夕焼けだ。

静かでありきったものは、どんな轟音よりも勝る。

一番大きな音は、無音だ。

「気付くと一日は長いものだね」

「寝てたら一瞬だけど」

「君は大学に行っているだろう？」

「『講義を受けること』は必ずしも『講義を聴くこと』とイコールじゃない。もつと言うと、『講義に出席すること』は『講義を受けること』とイコールでない場合も存在する」

「日本語は難しい」

「同意だね」

因みにぼくはちゃんと『出席』している。この世界に『無意味』なことはあっても、『無駄』なことは何一つとしてない。

世界とはそうあるべくしてある。

そしてまた少女も。

その17 遠雷

遠雷 11/26 木曜

ぼくは人を見つけるのが得意だ。人の視線に敏感なのだから当然だ。人の視線に気付きやすい人間は人探しが得意だと相場が決まっている。

「あれ、今日は体操着なんだね」

服装が変わってしようが、少女を視界に捉えるのは容易い。あんなに伸ばした黒髪を持つ人間をぼくは他に知らない。

少女は自販機の前でポカリスエットを飲んでいた。因みにぼくはアクエリアス派だ。

「……………」

「……………？」

返事がない。

視線は髪に隠れて見えない。

人違い……なわけがない。『これ』は間違いなく『少女』だ。視覚的要因など関係なく、ぼくにはそれが理解出来る。人を同一視するには、第六感が必要不可欠なのだ。

しかし返事がないのも事実であり、ぼくがもう一度声をかけようとしたら、少女は振り向いた。

「……………君か」

「……………体調悪そうだね」

「……………第一声がそれとは、そこまで酷い顔をしているらしいな、私は」

ワンテンポ遅れた応酬が少し心地好い。

本当の第一声は体操着云々なのだが、それは置いておく。取り留めのない会話は大好きだが、やはり少女の言った通り何事にも順序がある。整列できないものはないし、全てのものは整列されていないければならない。

『綺麗に』整列されていれば尚良い。そんな日が一度はあってもいいのかもしれない。

少女は有体に言えば熱っぽかった。瞳は力無く垂れ、頬は上気し、少し呼吸が荒そうではあった。

そしてどうでもいいが少女は胸が大きかった。着痩せというヤツなのだろうか。ジャージ着用とは言え、体のラインがいつも明らかになので、見えてしまったものは仕方がない。

……………なんだか調子が狂う。

ここでならば多くの視線を捉えた少女からのからかいがあってもいいのだが、それが無い。

異常は嫌いだ。

ぼくはチーズを探さないのだから。

「もう理解出来たと思うけれど早退だよ。君は今日は早く授業が終わる日なのかい？」

「そんなところだ」

大学生には任意に自主休講の権限が与えられている。尤も自己責任だが。

「……なんだか口を開くのも億劫だね」

「『雄弁は銀、沈黙は金』と言っじゃないか」

「単に『口は災いの門』に対する戒めだろう。大体黙っていて得をすることなんて一つもない」

「君を見terるとそう思っよ」

いつしかぼくらは歩いていた。

そしていつしかぼくは少女の荷物を持たされていた。

「眠たくなってきた」

「学校で寝てればよかったんじゃないか？ 保健室くらいあるだろうに」

「あんな固いベッドじゃ寝れたもんじゃないよ」

「でも君の形は明らかに病人だ」

「救急車でも呼ぶかい？」

「騒がしいのは苦手だ」

「私もだ」

そして少女は眠った。
ぼくは途方に暮れた。

その18 発展

発展 11/27 金曜

「人間は全知全能にはなれない。何故なら知らずにいた方が幸せな知識が世界の殆どを占めるからだ。何を以て『幸せ』なのかはこの際置いておくが。人間は幸せなくしては生きてはいけないのは摂理だ。もしそうなれるのだとしたら、それはもう人間じゃない。それが禁忌だとは言っていないけどね」

その言葉を最後にぼくは彼と別れた。

彼は何でも知っていそうな顔をしながら、何でも知っていそうな口ぶりで、事実何でも知っていた。

「心配しなくてもろにかは目覚める。いつかね。決められてることは変更することは出来ない。分かるだろう？」

分かっている。だからぼくは何も言わなかった。

何も言うべきではなかったし、何も言う必要性すらなかった。

ただ一つ解ったのは、何かが終わったことくらいだった。ぼくの中でその『程度』まで測ることは出来なかったが、それはとても重要なことであり、無限の中の一のように瑣末事でもあった。

やはり『起こった』という事実が大切なのだろう。まだ何も分からないぼくにはそれだけで十分だった。

「幸いにも君は何も知らない。何を以て『幸い』なのかはこの際置いておくが」

何も知らないことが？ そんなバカなことがあるだろうか。

「人間は急に視界が広がると逆に何も見えなくなる。暗闇から急に明るい所に出た時のようにね。情報の処理が追いつかないのさ。それは仕方のないことだし、少なくとも不幸なことではない。何故ならそれが普通なのだから」

微笑してから、「だけど」と彼は続けた。

「ろにかは違う。そして当の本人は倒れた。一時的なものだけだね」

……ぼくは今まで、何を知っていたんだろう。

知らないことは不安だ。だけど変化は望まない。ぼくはただ沈黙する辞書でありたいだけなのだ。退屈かどうかは、それから考える。

「君はまさに『うつてつけ』だ。ろにかが目をつけたのも頷ける。ただ――」

ぼくは目覚めた。

「……………」

全てが緩慢に動いている。身動きすら制限されそうな重たい空気に囚われた部屋は、昼と夜の境目の陽光を溜めこんで息苦しい。

起きぬけのノイズを耳に残しながら、ぼくは考える。

思考は正常だ。正常。『正常』。

ぼくはベッドから起き上がり、一階に下りた。

「あ、ご飯食べる？」

「いや……………」

何か言おうとした気がしたのだが、途中で忘れてしまった。

「変な兄さん」

そう言っただけ常夜は笑った。それを見て、ぼくはようやく夢から醒めたのだと実感した。

ぼくは少しだけ考えて、常夜に訊いた。

「畠辺君に家の住所を教えてください」

「……………身内がストーカーだった場合どうすればいいんだろう」

「どうもしなくていい」

ぼくは知ることを選んだ。

変わることは望まないが、ぼくは変えることを望んだ。

そのXX - ?

XX - ?

『三界の狂人は狂を知らず。

四生の盲者は盲を識らず。

生まれ生まれ生まれ生まれて生の始めに暗く、

死に死に死に死んで死の終わりに冥し。』

——『秘蔵宝鑰』弘法大師

それは既にそこにあつた。

そして、そこにある。

……いや、『既に』という表現は正しくない。そうすると無かつた時間が、空間が現れる。『そうでなかった』場合が計らずしも出現してしまう。

そんなものはないのだ。あるものはある。あるということとは、それだけで完結してしまうものなのである。それは普遍的であり、絶対的であり、両端に無限の如く延びる永遠であるのだから。

恐らく、『そこ』という指示語もおかしい。それはどこにでもいるものである。『そこ』にいれば『ここ』にもおり、『あそこ』にもいれば『そこ』にもいる。

だがそれは坐しているものであり、究極的に動きはしない。動いているのは、いつだって観測する側の方だ。それもまた氷山の一角であり、釈迦の掌でしかないのだが。更に言えば、その無数にある意思の一つに過ぎない。

しかし、それも——彼女もまた、退屈していたのだ。

退屈……そういった感情……感情ですらない、それは一時の『揺らぎ』。

「嗚呼、そんなものもありましたね」

無数の風景が、高速で走る車から窓の外を眺めるように、一瞬で過ぎ去っていく。それは二度と戻らない。似たようなものもあるかもしれないが、戻らないのだ。

彼女はかつてそれを止めたいと願った。
当然だが、それは叶わないことだった。
そして時は満ちようとしている。

「あの子は果たして、どうするのでしょうか」

滅びるか。それもまた一興。今では対になるものが圧倒するだろう。そうなってしまうえばこの身が果てるのも必定。まだ認識どころか観測すらされていないが、こうなったが最後時間の問題である。
……………しかし。

「
」

再び、『揺らぎ』が訪れる。

こここのところ頻度が高い。アレが近付いて来ているのか。
死が。もう一つの天が。

それは音も無く、死神の鎌のような不吉な冷たさと鋭さを携えて。
あまり、良い気分ではない。……………気分？

彼女は思う。やはり、いけない。

「ここまで侵攻されていましたか」

若干ではあるが、微々たるものではあるが、歪んできていること
には変わりはない。

だが、それによって彼女にも変化が現れた。平坦であり、清浄であり、無である彼女にも。

果たしてそれは感謝すべきことなのか。自分が自分に気付くことは簡単なことではない。

改めて思う。

彼女は世界を愛しているのだ。

この薄汚く薄寒く薄暗い世界でさえも。

A m o r , u t l a c r i m a , a b o c u l o r
i t u r , i n p e c t u s c a d i t .

「キリエ、イツキ」

あの子が認めたとされる人間。

そして彼女は『訪れるまで』静かに観察する。

登場人物その1

睽辺ろにか（あらたべ ろにか）：少女。世界を統べ、世界に殺される。全にして無。天なる器を持つ者。

霧江五樹きりえ いつき：青年。万能。友達皆無。K y r i o s .

霧江常夜きりえ としよ：五樹の妹。五樹こそが世界。五樹の連絡先を知る人物その1。

睽辺幻あらたへ まぼろしor（幻想天）：ろにかの兄。旧支配者。第二の天。

価々無杏梨かかなし あんり：常夜の手足。常夜の愛人。

氏咲松久うじさき まつひさ：最後だった人間。幻、彪の旧友。

椿彪つばき あや：幻、松久の旧友。世界に捨てられた女。

零式くるる（ぜろしき くるる）：白紙の終焉者。

皇周すめらぎ あまね：愛の左腕。魔女。

円上神威・愛の右腕。人間でもなく神でもない異物。

月見坂愛・ろにかと対になる少女。世界を呪う。現『世界』支配者。

その19 驟雨

驟雨 11/28 土曜

最寄駅から大学方面とは反対方向に八駅、即ち終点に着くと、そこはいわゆる高級住宅街として名高い地区だった。

駅前はそれなりに賑わいを見せているが、五分も歩けばぼくの基準で豪邸と言っても差し支えない一軒家やマンションが立ち並ぶ閑散とした路地へと身を投じることになる。

睨辺ろにかの家は駅から十二三分歩いた所に現れた。

「……………」

ぼくは常夜から訊き出した住所のメモに目を落とし、もう一度顔を上げた。

少なくとも、それとそこに相違はなかった。

そこには一目しただけで三十階はあるだろう真っ白のビルが聳え立っていた。そう、それは少なくともビルだった。マンションではないことはすぐに分かった。

ここには、人の生活臭が微塵も感じられない。

単なる『建物』が在るだけであり、その静謐さは人間の進入を拒んでさえいた。

物言わず鎮座するオブジェを前に立ち竦んでいると、

「ああ、来たのか」

振り向くと少女が——睨辺がいた。両手には駅前で見かけたスーパーのビニール袋が提げられていた。

「ここ君の家で合ってるのか？」

「家……家か。そうだね……便宜上そういうことになってるかもね」

「つまり『家』とも言えるし、『家』とも言えない」

「その通り。君は理解が早くて助かる」

睨辺はいつもと変わらない表情を見せながら、『家』へと向かった。

「君も来るといいよ。こないだ迷惑をかけてしまったお詫びも兼ねてね」

ぼくは睨辺の後ろについていく。

入口の自動ドアを抜けると十メートル四方のただっ広い空間の先にまだ閉まっているエレベーターの口があるだけだった。

まるで薄い氷で出来た床を歩くような気分で、ぼくは造られた絶対零度の中を進む。

エレベーターに乗る。

行き先は二十五階。

降りると、十メートル四方空間には変わらないが、その壁には等間隔で扉が据えられている。

睨辺は当然ながら迷うことなく、扉を開け部屋に入った。

「世界が終わろうとしてるんだ」

そう睨辺が言っても、ぼくは特に驚くべき感情を持たなかった。真っ白な部屋で、真っ白な机を挟んで、真っ白なコーヒークップを傾けながら睨辺は嘆息した。

「でも私は知らない。知らないところで世界が終わろうとしている。これってとても理不尽なこととは思わないか？」

「と言っても君には興味がない」

「そうでもないさ」

畠辺はコーヒーを飲み干す。

「君だって今この瞬間にでも地球が滅んでしまえばいいと思ってるんだろう？」

「人の心は移り変わりやすいんだよ」

昔の人の言葉を借りるなら、海や山の天気よりも、
ぼくの顔をじっと見ながら、畠辺は頷いた。

「まあそう言うと思ったよ」

「でもすぐにつてわけじゃないんだろ？」

「それは私の決めることじゃない」

世界は緩やかに流れている。

ぼくは彼女の出したコーヒーを静かに飲み干した。

その20 可逆

可逆 11/29 日曜

海を臨む堤防。それは学校の屋上と同じ匂いがする。或いは、自然に呑まれた廃墟の匂いだ。

何と言うか、秘されており、黙されているのだ。

「海が近いのは良いことだね。人知の及ばない自然が傍らにあるのは程良い防波堤になる。海に向かって叫ぶのは何だっけ。『ヤッホー』だっただっけ」

「『バカヤロー』じゃなかったか？」

「ああ、そうそう。誰が言い出したんだろうね。別に山で『バカヤロー』でもいいのに」

「海の神様は寛大なんだよ、きつと」

「そんなものか」

畚辺はぼくの前を歩きながら、ついと振り返り、いつものように真意が見えない笑みを零した。それは砂のようで、止まることはなく、笑みを『浮かべる』よりも『零す』といった表現の方が適しているように思われる。

やはり儚げであり、幻であり、ボール一枚隔てたところにいるのが畚辺なのであった。

「とは言えこの季節だと少し寒いね」

十二月も間近に控え、今日の最高気温は九度だと聞く。海風も強く吹き付け、流石に彼女はロングスカートだった。

「でも寒いのは嫌いじゃない。虫が出ないからね」

「またみみっちい悩みだね」

「これは深刻なんだ」

特にゴキブリに関しては未だに半径三十センチ以内に近付けない。この際言ってしまうと家で発生したヤツは全て常夜が始末してくれている。

「だけど常夜はセミは大の苦手だと言う。ぼくは素手で触れる。基準が分からない。」

「どうやら君は私の思っている以上に苦手な物が多そうだ」

「ぼくにとってこの世には苦手な物しかない」

「言い得て妙だね」

「そうじゃなきゃ生きてなんてられないよ」

だからこそ生きていられる。何故なら人間は不完全だからだ。いつも死を考えられる存在だからこそ、こうして『生きる』ことが可能なのだ。

死を忘れた人間は、もう正常に生きることとはできない。それはこの世の理から外れるとも言っている。何にせよ、ぼくらと世界を違えて見るこの出来るモノを、人間と呼ぶことは出来ない。

畚辺は立ち止まり防波堤に座る。
ぼくも立ち止まり隣で立ちつくす。

「君は世界が終わることに対して怖くないのかい？」

「大学の単位落とす方が怖いね」

「まあ、君らしい答えだ」

太陽が沈む。これもまた一つの『終わり』だ。
だけど全ては循環する。回帰する。『完全な終わり』とは循環の
停止だ。それに怖さを抱くかどうかは全くの別にして。

「前に君に言ったね。私の嫌いなものは三つあると」

「ああ。覚えてるよ」

「それらよりも実は圧倒的に嫌いなものがある。その後で一番嫌い
と答えた『自分』よりも圧倒的にね」

ぼくは黙る。

彼女が語るのを待つ。

語るのを待つ。

待つ。

待つ。

待つ。

待つ。

待つ。

待つ。

待つ。

陽が沈んだ。

「夜だよ」

——待つ。

待つ。

待つ。

待つ。

待つ。

待つ。

待つ。

待つ。

待つ。

待つ。

待つ。

待つ。

その21 束縛

束縛 11 / 30 月曜

「兄さん、今違う女の子のこと考えてたでしょ」

隣を歩く常夜の声で我に返った。

「何がだ？」

「何がだ？ じゃないでしょ。言葉の通りのことを言ってるの」

「それより腕を絡みつかせて歩くな鬱陶しい」

「話逸らさないで」

その事件の一報は、大学の二時限目の講義が終わり、昼食を食べようと思った矢先のことだった。

常夜からのメールを要約すると、学校の近くで週末から行方不明だった生徒がバラバラ死体で見つかったらしく（バラバラかどうかは噂の域を出ない）、急遽午前中で授業を切り上げ下校することになったとのことだ。女子高なので大抵の生徒は親が迎えにくるらしいので、仕方なく昼食と午後の講義を犠牲にしてばかりが常夜を迎えに行くことになった。

何事も優先順位だ。どうせ月曜の三時限目は出席日数が足りている。

「本当に兄さんはデリカシーがないよね」

「身内相手に何言ってるんだお前は」

「もういいよ」

わざとらしくそっぽを向く常夜。しかし密着させたその体は離れようとしなない。最初からそんなつもりなんて微塵もないのだ。そして相手に質問する時はそうであるように、常夜は相手の反応を見て会話するのが楽しいだけなのである。

ある意味において、たまに彼女を連想させた。

……逆だろうか。

彼女と話している時に、無意識の内に常夜が？

「死んだ奴はお前の知り合いか？」

「ううん。三年の先輩。顔も名前も知らないけど」

「そうか」

誰かが死んだ。それは非日常を象徴する際たる現象であり、大多数の人間はショックングでセンサーショナルなそれに歓喜し、狂乱する。

本質的に人は自分の知らないところで起きている何かに驚くほど敏感である。それが残酷で残忍で残虐であればあるほど。

ばくも、そうだっただろう。

恐らく一ヶ月前くらいまでのばくだったら。

「まだ死ぬよね？」

「ん？ 何？」

「人」

常夜が笑う。

もう十一月は終わりで、それは十二月が始まるうとしているということ。

たったそれだけのことであるし、まさしく訪れようとしているわけでもある。

だがぼくには分かる。理解出来る。

『何かが始まるうとしている』

その前触れが。

「そういうことはあんまり外で言うもんじゃないの」

「はい」

常夜は機嫌良く返事をする。常夜は気まぐれだ。だから気に入っている。

「明日も学校あるのか？」

「ないよ。当分ないんじゃないかなあ。どっから聞きつけたのかわらないけど、もうマスコミとか群がってたし。アイツらプライバシー無視するから嫌い」

「そうか」

個人的に早く犯人が見つかってほしかった。そうでなければ常夜の呼び出して大学の講義がいくつ潰れるか分かったものではない。

まあ常夜が悪いわけではないのだけれど。

「明日から十二月だね」

「ああ」

それは終わりの時期。

そして睨辺ろにかは――

その22 天蓋

天蓋 11 / XX

「名前は」

朱鷺津茜^{ときづ あかね}。女性。十八歳。私立高天女子高等学校の三年生。クラスはB。同学校の生徒会副会長でもある。

「何故殺された」

何故？ 『何故』だって？ それはお前が一番知っていることだろうに。彼女は殺されることは偶然じゃない。それにただの必然じゃない。必然中の必然だ。『文章^{テキスト}』に書き換えは許されていないしそもそも不可能なのはお前が知らずして誰が知る。

「通り魔の可能性はないのか」

素手で手足を引きちぎる通り魔か。何とも愉快なことだな。まあそんな通り魔がいても、おかしくないかもしれないな。もう『何が起こつてもおかしくない時期』に入りかけているのだから。

「そんな殺人的な握力を持つ通り魔には出会いたくないものだ」

どちらにせよ、その程度のことはお前には些事か。

「言うまでもなく」

そうだろうな。そうだろうよ。しかしお前が些事に拘ることはよ

く知っている。だからこそその確認だ。

「ああ。『本質はいつも道から逸れた場所にある』」

道理だ。

「……それにしても、分かりやすいことをしてくれる」

全くだ。だからこそ本命ではないと言っているようなものだ。或いは単に飢えた餓鬼かもしれん。そっちの方が厄介だが。

「死体は？」

回収した。死亡時刻は土曜の深夜。今は『喰い者』の範囲を絞り込んでいる。早急にな。まだ一人だけだからスパンも何もあるいはないが、早ければ早いほど良い。まあ捕まえたところで屠殺体が一つ増えるだけだろう。物言わぬ畜生ほど手のかかるものはない。俺としては放っておいてもいいんだが。

「まだそんな時期ではない。こんなにも秩序が溢れかえっている、こんな状態では」

そう言うのがお前だ。分かっているさ。分かっていたさ。だから捕まえようじゃないか。捕まえてやろうじゃないか。

「……やり方が露骨だ。気に入らない」

反応を見てるんだろう。舐められたものだな。そんなことは通用しないというのに。そんなこと如きでは動じないというのに。

「だが慢心は禁物だ」

お前はいつもそうだな、幻。それが悪いことだとは言わんが。…
…ああ、全くお前の言う通りだ。だからこそ、ここまでやってこれた。

「当たり前だ。二度目はない」

ならば予定通りか。

「ああ。ようやくだ。一週間以内に俺も動く」

学校は無期限の休校状態に入った。
非日常が侵蝕し、空気が変わった。

空気が変わると言うことは、世界が変わると言うことだ。

朝日が、雲が、鳩が、信号機が、風が、言葉が、思考が、全てが、
だけど、私は変わらないことにした。

そうすることが、抗い。

そうすることが、生きること。

「さて」

今日もまた対話が始まる。

その23 日常（嘘）

日常（嘘） 12 / 1

「おや、今日はスーツなんだね。就職活動かい？」

「まあそんなところだ」

畠辺は私服だった。常夜の言っていた通り、昨日の今日と言ったこともあり、やはり学校は臨時休校らしい。

しかし至極当然の事の運びだが、世界は一秒たりとも止まることなく動いている。人間一人が惨殺されたところで、就職活動は中止にならないし、大学の授業も休講になったりせず、日がいつもより早く昇ったり早く沈んだりすることはない。

人間は自分の世界が安寧であれば、それだけでいいのだ。だから子供は台風を待ち望み、信心深い人間は世界の終末に歓喜する。

誰一人として、次は自分の番であると知ることはないままに。

「暇そうだね」

「家にいてもすることがないからね。それに場所が場所だ。あの近辺を歩いていても通行人より警察の方が多い始末だよ」

「確かに。かなり閑散としていたからな、あの地区は」

「皆外に出るのが怖い連中ばかりだからだよ。完璧な自分達の箱庭を手に入れた末路があれだ。よく都会は、自分の部屋の隣人の顔さえ見たことがない、と対人関係の希薄さを揶揄しているが、あの地帯はその究極だ。まだ『隣人』がいると他人の存在を積極的に知覚

しているだけ、その例え話はマシな方だね」

「なかなかユニークな所だね」

「実験都市だからね」

「実験？」

「詳しくはウチの兄に訊いてくれ」

「まだ一回しか面識ないんだが……」

想像してみる。それはどんな空間なのだろうか。誰もがいながら、誰もがいらない。

人の気配はするが、人の『におい』はしない。

誰も言わない。

誰も見えない。

誰も聞こえない。

「よく人体実験は非人道的だと言われるけど、ああいう輩は数えきれない犠牲を踏んできた現代医学の恩恵に与る資格はないと思うんだよね」

「刹那的なんだよ。誰も彼も」

「目の前のことしか見ないというのは、とても幸せなことだろうね」

「目の前のことから片付けないと生きてはいけないからじゃないのか」

「なかなかまともなことを言うね」

「そうとは思わないけどね」

反射的に答えてしまったが、果たしてどうなのだろうか。

まともだつて？　ぼくが？

まともとは何だ？　正常だということか？

それは間違いだ。正常だがまともでない奴なんて五万とい
ではまともでないとは？　それが普通なんじゃないか？

「そんなに免罪符が欲しいのかい？」

「……………」

睨みがぼくを覗き込む。

酩酊感。

ぼくと世界が『さかしま』になる。

「逆だろ」

「ああ。君はそうあるべきだ。そして、私もね」

「あまり先のことは考えたくない」

「誰だつてそうさ。君の言う通りにね。だけど、いずれは考えなければならぬ道と考えるくていい道へと分かれることになる」

彼女の言うことをぼくが理解するには、もう少し時間を要した。

その24 胡蝶

胡蝶 12/20r?

厭な、夢を見た。

内容は覚えていない。だが、不快であったことは紛れもない事実だ。おぞましく、いまわしく、惨たらしく、酷く不愉快であり、嫌悪感という嫌悪感を催し、惨憺たる光景を目の当たりにしたかの『ような』、濃い霧を隔てた先にある光景。

これは説明出来るものではなく、感得するものであり、本当の悪夢というのはこういうものではないのだろうかと思ふ。

時刻は午前三時二分。

夜明けまでには、まだ三時間以上ある。

「……………」

最悪な時間に起きてしまった。

この静寂。硬直した時間。膨張する世界。何もかもが耐えられない。そろそろあの睡眠薬にも抵抗が出来てしまったのか。この頃眠りが浅い。

頭は冴えている。二度寝は出来そうにない。

ぼくは起き上がり、右手で頭を抱える。ただの重い球体だ。

その時、ぼくの携帯電話が振動した。

「……………」

アラームは設定していない。電話番号にしてもメールアドレスにしても、ぼくは三人にしか教えておらず、その三人共こんな時間に連絡を取ってくる非常識な人間はいない。

ぼくは携帯電話を手に取り、ディスプレイの表示を見る。

『着信：非通知』

つまり、ぼくに電話番号を教えたくないわけである。別にぼくが番号を知ったところで何をやらかすわけでもないのだが、少なくとも相手からは無駄な流出を避けたいのだろうという思惑が見て取れる。

寝起きの頭で冷静に分析している間も、電話は鳴り続ける。

十五秒鳴ったところで、ぼくは電話を取った。取らなくてもよかった選択肢は勿論あった。だけれど、今のぼくはそれを取ることが最良の選択肢であると思ったからだ。それも感得に至るところのものであったのだが。

「……もしもし」

声を発する。数年ぶりに発声したような感覚がして、ぼくの声がぼくの声じゃないような錯覚に陥る。

返事はすぐにあった。

「やあ。起きていたのか」

「……………何で君がぼくの携帯電話の番号を知っている」

「説明が必要かい？」

「……不要だね」

「だろう？」

世界はそうであるがために回っている。説明はいつだって不毛なものだ。だから太陽が眩しくて人を殺すことは正当な理由になり得る。

「しかし携帯電話というものは難儀なものだね。有史以来こんなにも人間を縛りつけるツールはかつてなかった」

「深夜に電話してくる人間がそれを言うか……」

「それもそうだね」

睨辺は笑う。世界のどこかで睨辺が笑っている。それはとても靈びめいており、どこか安心させるものでもあった。

今のぼくにとっては、特に。

髪をかき上げる。額が少し汗ばんでいた。

不快だ。

「それで、結局何か用事でも？」

「用事……そうだね。用のある事には変わりはない」

一息置き、睨辺は続ける。

ノイズが、かかりはじめた。

「君に関わることでありながら、君は全く関係がない。しかし君は聞かなくてはならない。訊かなくてはならない」

「何をだ」

即答。

その25 円環

円環 12 / 参

夢から覚める。果たしてそれは一つの終わりなのだろうか。

「酷い目をしてるね。もしかして君も風邪だとか？」

「変な夢を見たんだ。でも……そうだな、寝汗で風邪を引いた可能性もある」

「悪夢から覚めるとほっとしたかい？」

「あまり変わらないね。現実の方がよっぽど悪夢だ」

「でもそれは言い得て妙かもしれないよ。誰も知らない、或いは目を逸らしている真実を穿っている」

「……そんなことを言ってた人もいたね」

その人はとても怖い話だと前置きをして語り始めた。

いつもと変わらない日常。平和な日常。長閑な日常。穏やかな空気が流れ、安らかな風が吹き抜ける日常。誰も怯えておらず、誰も不安ではなく、それは完全に理想の『日常』の風景。そんな中に快く身を委ねる自分。そう、『いつもと変わらない』のだから、何も疑問に思うことはない。何も不満に思うことはない。

だが、そこで『目が覚めた』。

それがとても恐ろしいことであつたと。

「成程。それは確かに『恐ろしい』」

「だろう?」

「人間は思っている以上に無知であることを裏付ける良い話だ。鈍感であるとも言えるかもしれないね」

「信じる者は救われる。そうとでも思い込まないと、普通の人はやっていけない」

「君はどうなんだい?」

「ぼくは普通の人だ」

だけれど今この瞬間、「これは『夢』でない」と断言出来る人間が果たしているだろうか。

自分の意識が正常であるかどうかなんて、自分にも他人にも分かるはずがない。何故なら、結局判断するのは自分自身だからだ。或いは、誰でもない。

フィクションかノンフィクションであるか、議論することすらナシセンスだ。

「『鶏が先か、卵が先か』を思い出すよ」

「生化学的には鶏が先らしい」

「しかしもつとマクロ的な意味合いで見れば、答えは出るものじゃない。何しろ、始まりも終わりもないんだから」

「輪廻転生というヤツか」

「別に宗教は関係ないんだけどね」

畠辺はブランコを漕ぐ。

ぼくは傍らの鉄柱に身を預ける。

錆びれた鉄同士が擦れ合い、歪んだ音を立てる。

空は紅い。

雲は一面に零れた紅色の絵の具を吸い取り、ぼんやりとした朱色を浮かび上がらせている。

空気はシンとしており、風に運ばれてくる寒冷な匂いが心地良い。雪は、まだ降らない。

「――」

少し目眩がした。

満月と同じように、紅すぎる夕焼けは見ていると気分が悪くなってくる。

前にも目眩を感じたことがある。

どこで？

「まだ犯人捕まらないみたいだねえ」

「やっぱり学校なかったら退屈なのか？」

「学校？ まさか。あんな無菌培養施設なんて本当は一日だって居たくないよ。兄様が言うから行って」

「兄様？」

「……………」

「……………」

「私は変化を求めてるだけさ。始まってしまったからにはね」

畠辺はブランコを降り、長い影を携えながら遠ざかっていく。

その夜、二人目の死体が発見された。

その26 壺中

壺中 12 / 参（裏）

「意外に早かったわね、二人目」

「そう？ 私としては十分想定の範囲内だけだなあ。殺ろうと思えば出来たけれど、やっぱり万全を期したいし」

「じゃあ次を狙う？」

「出来ればね。そろそろ向こうも動くだろうし、まさか全く進展がないわけじゃないでしょう。私達と同じ、虎視眈々と獲物を追い詰める手合いよ、アイツらは。とりあえず、泳がされているのに気付いてないのか、何が来ても返り討ちに出来るほど自信があるのか……どっちかは知らないけれど、三人目はそう遠くはないことだけは分かるかな」

「なら、今日から寝ずの番ね。長い夜になりそうだわ」

「ゴメンね杏梨。これに関しては頼ることしか出来なくなつて」

「いいえ、気にすることはないわ。貴女は、自分のしなければいけないことだけを考えてればいい。私がそのために万全を期すのなら、貴女もそのために万全を期さなければならぬ。私が願うところは、貴女の悲願の達成なのだから」

「ありがとう杏梨。分かってくれてうれしいよ。——だからこそ、私達はここまで待った」

待つ。それは単純にして困難を極める行為。

私は待った。まずは第一段階はクリアだ。次は第二段階。

勝つ。必ず。

そして、兄さんに寄りつく全てを排除する。この手で。完膚なきまでに。

「範囲は穂都万市全域でいいかしら？」

「十分」

「一応最高密度で連続80時間稼働だけれど、貴女としてはどれくらいに動くと予想する？」

「……今から40時間から50時間が山かな。とにかく『巢』に引っ掛かった時点で早急に連絡頂戴。ただ殺すだけじゃなくて、アイツらを出し抜くことがある意味第一条件なんだから」

「ええ、分かっているわ。その点は任せてもらって構わない」

絶対にアイツらより先に辿り着く。そうでなかったら、意味がない。

兄さんは私のものだ。世界がどうなるうが知ったことではないけれど、『私の』世界を壊すことは他の誰であろうと絶対に許されることじゃない。

それが例え世界そのものであろうとも、私は何でもしてどうにかする。

「落ち着いて。また血が出てる」

「あ」

言われて気付く。また鼻血が出ていたようだ。

「今から興奮していたら世話がないわよ。もう少し制御を覚えた方がいいわ。貴女は貴女だけなんだから」

杏梨はいつもと同じ、抑揚のない、感情のない、機械のようであり、人形のような声で、私を安心させる。

兄さん以外で私の側に居ていいのは、杏梨だけ。
その所以だ。

「それじゃあ、二時間後に『起動』するわ。その時まで、自愛しておいて」

「ンククツ、信頼してるよ、私の杏梨」

「ええ、『だから』貴女が好きよ、常夜」

夜は更け、月が昇る。

『夜』は始まったばかりだ。

幕間

白黒 - 幕間 -

哀愁漂う香ばしい秋の匂いを吸い込みながら、薄く黄金に染まった陽光を浴びて私は歩く。

私はこの時間帯が一番好きだ。微かに聞こえる潮騒、遊具で遊ぶ子供達、談笑するお年寄り、車の音、自転車の音、ベビーカーの音。それら罅割れた音、全てが穏やかで愛おしい。

たおやかな風が吹き抜ける度に、私は目を閉じて思う。

それは過ぎ去った時間であり、これから来る時間。

それはセピア色であり、ゆっくりと流れる。

あつちに行ったり、こつちに行ったり。

何ものにも干渉されることはなく、シーソーのように規則的な運動を繰り返しながら。

まるで ♪ 42 のように。

「好きな作家は？」

「カミュと梶井基次郎」

ほらまた、そこにも旋律が。

分かっていると思うが、それは音ではない。言葉から一元的な連想しか出来ないのはいけない。幹からは無数に枝が伸び、そこから更に無数の葉が出てくる。そのような行為は、世界を小さく見えている。まっている。

世界は大きい。決して「広い」ではない。私達は内包されているのだから。そして私自身なのだから。

——ほら、『また』だ。

だから私は独りだったんだろうか。別にそれを苦と思ったことはなかったが。

ただ、少し寂しいな、とは思った。私も人間だ。支え合う関係にはなりたくないが、せめてキャッチボールくらいはしたいと思ってはいた。

ふうっ、と風が吹く。

私は靡く髪を押さえる。正直鬱陶しい髪の長さだったが、兄様が黒髪ロングは譲れないとかわけの分らないことを言うので、仕方なくそのままにしている。

「長くねえか？ その髪」

「君もそう思うのかい？」

「傍目から見たらな」

「いつも君は自分の意見を持たないね」

「自分？ 自分とは何だ？ それが『俺』と何の関係がある？ どうせ全部は『一部』でしかない。そのような思考、大海に浮かぶ泡沫より儚いものだろうな。下らなくはないが……徒労だ」

「……詩人だね」

「『俺』はそう思わないけどな」

回転。循環。連鎖。日は昇り沈み、起きて眠る。

私達は閉じ込められている。いや、私達が『閉じ込めている』と勘違いしているのだろうか。

だから、憂いてしまう。私の世界から、私の宇宙から見たら、こ

んなにも瑣末事だというのに。

一秒にも満たない刹那に、人間が何を思えると言っただ。

「もう四時か」

「……あまり私の前で時間の話をしないでほしいとこの前も言ったと思うんだけど」

「何言ってる。時間に縛られないで何が人間か。腕時計持っていない奴は人間失格だと思うぜ、『俺』は」

「時間を忘れたい時だってあるんだよ」

「逃避か。まあそれもいいかもしれんが、『俺』は『反動』とやらが苦手だね。だから常に知っている必要があるわけ」

「そんな石橋を叩くような毎日で疲れないかい？」

「石橋を叩く？ そんな馬鹿なことする奴とは知り合いにすらなれそうにないな」

時間は過ぎる。四時が来ると言うことは、五時が来ると言うことであり、六時が控えていると言うことでもある。

だから私は、時計が嫌いだ。

一年前の話。

まだ私は『彼』を知らない。

その27 黄昏

黄昏 12/3 - ?

——誰そ彼？

暗い。どこまでも黒に塗り潰され、一寸先も見えない。果たして一寸先には『前』があるのかどうかすら。

昏い。眩み、昏い。何も分かることはない。だが全てを掌握している。どちらも窮めれば辿り着くこととなる。

冥い。一つの終わり。先には何もなく、何もかもが広がっている。内は外であり、外は内となり得る。

漆黒の中には二人の人間。

白と黒だ。

だがどちらも『黒』であることには変わりはない。

光の中にこそ影があり、影があるからこそ光がある。

玉座のような椅子に座る白の背に向かって、黒が肅々と言葉を投げかける。

「——放っておいていいのか？ もう手遅れ故、こうして疑問を投げかけるのは由無し事だろうが、早ければ明日には影を踏まれることになるぞ」

「……………何のことじゃ？」

「毎回言つのも飽きるものだが、私は言葉遊びが好きではない。それに私は待たされるのが嫌いだ。貴女の意見を率直に聞きたい」

「……………言つて今更どうこう出来ないのは分かつておるうに。余から直接判断を仰がないと不安なのか？」

黒は——えんじょう かむい円上神威は黙つたまま、白——つきみざか あい月見坂愛の返事を待つ。
彼は嫌いなことを進んでやる。そういう男だつた。

「仮にも其方は代行、特に余の意見などいらぬのではないか？」

「部下の不始末は貴女の不始末だ。私はただ、与えられた下命をこなすだけだと言うことは、最初に言つたはずだが」

「……全く、其方は変わらぬな。ああ堅苦しい。そんなので人生退屈せぬか？」

「それは貴女が一番よく知っているはずだ」

世の中の万物は変わりゆくものだと思じている者が多いが、それは間違いである。

あらゆる『何か』が『どうにか』なつても、変わらない事象が、明らかな永久不変と言う名の特異点がこの世界には存在するのだ。

世界は、宇宙は、あらゆるものを包括している。『ここ』ではただそれが通じないだけの話。

説明するまでもなく、それは瞭然たる事実なのだ。

愛は立ち上がり、振り返る。ヴェールのような、しかし威圧感すら醸し出す、ポリウムのある金髪を靡かせながら。

その表情は凜。神威の肩にも届かぬ身丈なれども、世界の全てを相手取っているような瞳が彼女の全てを物語っていた。

「零式くるるはどちらにせよ激突する。早いか遅いかだけの話じゃ。それが明日であっても、一年後であっても、千年後であっても、然

したる差異ではない。加えて言うなら、『何処で』、も一緒じゃ。問題なのは付随される結果。そして『それから』。——其方なら、十分対処し得ると思えるかの」

「……恐らく今宵も殺すに違いなことだけは分かる。そうしたら三人目だ。今のアイツは気が立っている。止められることはあつても、止まることはないだろう」

間髪入れず、白く透明な声が確信めいた調子で踊る。

「すると、『止まる』であろうな」

「それなら、彼女にはやはり礎に？」

「礎……まあ呼び水と言ったところかの。彼奴の誰がくるに『そう』させるかは分からぬ。もしやもすれば相手に戦意自体あるかどうか懸念があるが、十中八九杞憂に終わるじゃろつて」

「貴女は心配しすぎだ。アレらは必ず来る。今日があつて、明日が来るように」

「何を言う。心配することは生きていることの証じゃ。日々常に憂いを忍ばせておくことこそが、世界を呪うに値する天の器よ」

愛は嗤う。

それはいつかどこかで見た嗤い。

まるで鏡のように、そこにはもう一人が映っているかのように。

「しかし——面白い。嗚呼、これは『面白い』。これは周あまねが戻ってくるまで、退屈せずに済みそうじゃ」

「彼女はどこに？」

「さてな。大方まだ受肉しておらぬだろう。まあ特に心配はしておらん。あ奴はあるべき時に来る。そう分かっておるからの」

さあ、いと小さきもの共。余を楽しませておくれ。充たしておくれ。

これで最後にするつもりじゃからの。よもや簡単に膝をつこうとするわけはあるまい。

生けるもの、往けるもの、逝けるもの。遙か彼方へ、彼岸へ。余へと、彼へと、靡くがよい、曳かれるがよい。導かれるがよい。自我を、渴望を、欲望を、偏痴を、困窮を、憤怒を糧に。

待つておるぞ。待つておるぞ。待つておるぞ。待つておるぞ。待つておるぞ。待つておるぞ。

予定調和など、余興にすらならぬのだから。

「では、完璧な征服を始めるとしようか」

月見坂愛は詠うように宣言する。

そしてこの時点を以て、完全に幕が開いた。

その28 黎明

黎明 12 / 4 o r 4 ?

大学に行くと門が閉まっていた。

「……そりゃそうか。敷地内から見つかればなあ……」

大学に友人がいないとこういう時に辛い。この大学に来てから休講等で無駄足を踏んだ回数は両手では数えきれないほどである。一人だけ在学生で知り合いがいるが、もう半年以上連絡を取っていないし、物凄く飽きっぽいのもしかしたらとつくに退学しているのかもしれない。

このまま門の前で立ち往生していたら馬鹿みたいなので、ぼくは踵を返し来た道を戻る。

朝の人の往来の波を逆らって歩く。皆、目的地を目指して歩く。皆、目的を持って歩く。それはとても幸せなことである。この上なく。

皆歩いている。時には段差もある。それは生きているということでもある。それ故に、ぼくも辛うじて生きている。

ぼくはどこに行くでも無く、とりあえず駅へと歩を進める。現実的な話をする、帰ったところで常夜に家事を手伝わせられるだけだし、畠辺の家は既知であるにしても、ぼくがそこに行ったところで畠辺に会える確証はない。

そもそもぼくらは通常そんな風に会うべきではないし、恐らく会うことはないのだろう。

そんな関係。そんな縁。そんな因果。

あらゆる系が交差し、重なり、絡まり合う中で、ぼくは生きてい

る。そう、ぼくは。
だから――

「――」

予期せぬことなど、ない。

そう思っていた。

のだが。

「キヒッ」

ぼくが『なにか』と擦れ違った、

瞬間、

世界に罅が入った。

「あ」

刹那の内に何もかもがこの場から遠ざかっていき、また元に戻る。しかし、それはもう決して同じものではない。

乗っている電車がトンネルの中に突入した時のように、急に水の中に頭を埋めた時のように、一瞬周りの音が瞬時にして遠ざかっていき、別のものに变化する。

感覚でもあり、知覚でもあり、ぼくはそれらに身を任せて咄嗟に膝を折った。

「痛っ」

風が。

ざしゅ。

ざしゅざしゅ。

『ざしゅ』。

風ぐ。

ぼた。

ぼたぼたぼたぼた。

それは確かに音だった。調べだった。響きだった。旋律だった。

しかし、明らかに、聞いたことも無い、日常から外れた——滑稽で、相応しくなく、吐き気を催すような『不協和音』。

何を落とせば、こんな音が出るのだろうか。出てしまうのだろうか。事実、それは出てしまったのだ。

ぼくは、こんな音を聞きたいがために生きたいのではない。

「キアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア
アアアアアアッ！！」

悲鳴が弾ける。絶叫が弾ける。怒声が、泣声が、喚声が、男の
 声が女の声が子供の声が老人の音が――

列が乱され、幼子が紙を無秩序残酷に引き千切るようにして安寧は破られる。

1

ぼくは立ち上がる。

咲き乱れる椿の中、ぼくは佇む。

視線の先には、狂気が居た。

「キビツ……キビツ」

ニット帽、サングラス、マフラー、長袖長ズボン、手袋、ブーツ。

怒っているようで、泣いているようで、笑っているようで——そこにはいくつもの感情が同居していた。

そして病的なまでに伸ばした漆黒の蓬髪の際間から、どんな光よりも明るい闇が蠢いていた。

百足が這うように、蛇が蟠っているかのように。
なんて——不快。怖快。腐快。

一目見て分かる。アレはヒトの目をしていない。

あんなに妖しく光る球体を、眼球というのは間違っている。

「……クソ」

視線に縫い付けられる。だからと言って動けないわけではない。

ぼくが憂いているのはいつだって今より先のことだ。

行動は、常に主体的でなければならない。

だけれども――

「みつけた」

脳に直接響いてくる。もしくは、直接響いてくるのが脳なのか？

『みつけた』と言われたのならば、ぼくはおそらく『みつけられた』のだろう。

まるで白痴のような表情を浮かべながら、ソレは愉しそうに口端を一層吊り上げる。

周りはまだうるさい。ぼくがそう感じているだけのこともかもしれない。しかし、正直なところぼくは静かな方が好みだ。

ソレが足を踏み込む。前進、跳躍の構え。ソレはぼくから目を逸らさない。標的がぼくであるのならば、成程考える必要がある。応える必要がある。

ぼくは右足を前に出した。
が、

「ッ!？」

明確に『何か』を感知した仕草。ソレは弾かれたように、顔をぼくではないどこかへと上げる。

そこからは一息だった。

消えた。

「……………」

いなく、なつた？

事実目の前からはそのままの、あるべきものがある世界へと戻っていた。今のようなく、どう見ても『外れている』ものはそこにはなかった。

すう、と感覚が戻る。

気付くとぼくは何人かに話しかけられていた。しかし聞こえない。聞こうともしない。取捨選択は大事だ。

息を吸う。今何が起こったのか。

落ち着け。自分を発見しろ。見失うな。

「っ……………」

心臓の鼓動が乱れている。こんなことは初めてだ。故に――異変が始まっている。

「……………」

ぼくは走り出す。

相変わらず何も聞こえないままに。

とにかくこの場所に留まっていられない。

その29 深奥

深奥 12/4or4 ?

静寂は破られた。

それはつまり、『天』の亀裂を意味する。

故に、侵入が始まった。

「意外にせっかちな奴だな。駅前の往来でやらかしてくれるとは。流石にここまでやられたら隠蔽もクソもあつたもんじゃない」

携帯電話を片手に、氏咲は煙草を啜えながらぼやくように言う。目の前のテレビに映し出される番組は、どの局も臨時ニュースで非常に慌ただしい。仰々しいテロップが踊り、現場とスタジオの映像が目まぐるしく切り変わる。三十分ほど前からずっとこの調子だ。

白昼堂々、ほぼ同時刻、広範囲に亘り数十人単位で人の首が飛んだのだ。加えて犯人は未だ不明ときた。あまりに奇妙極まる『現象』に、テレビ越しから現場の混乱がありありと窺える。

それにしても――

「全く。懲りないねえ。どこの世界も」

人。人。人。人。人。人。何と気味の悪い『つながり』だろうか。

哀れだ、と氏咲は思う。何故こんなにも滑稽な光景しか映らないのかと思うと、溜息の一つくらい吐きたくなると言うものだ。しかし、『現象』そのものに関しては、氏咲は久々に感情が動いているのを自覚した。

だから『those』が動き出したことは最早疑いの余地なく火を見るより明らかだが、この暴拳には少なからず氏咲も眉を顰めざるを得なかった。

あの男なら、尚更である。

「こりゃ一週間も腰を据えてる場合じゃなくなってきたかもしれないな。何考えてるのか分らないのは重々承知の上だが、ちょっとあれははしゃぎ過ぎだ。そう思ってるんだ。この『俺』が」

「……………」

テーブルに置いてあるカップにブラックコーヒーを注ぎ、一口飲んで気を落ち着かせる。

「多分『those』としては、モルモット一匹放った程度の認識しかないのだろうさ。大体無差別殺人なんて真似、あまりにも程度が低すぎる。だけれども……あの女なら、やりそうなことだ」

「……………」

「ああ、言つのを忘れていたが、彪には既にスタンバってもらってるから、お前の指示を出し次第出勤出来る。さて、どうする？」

「……………まだだな」

きっかり五秒の沈黙を守り、幻はあくまで妥協的に答えた。

重苦しく、軽々しく、厳格に、鷹揚に。

最初から決まっていることだからこそ、十分に吟味する幻の性分を知る氏咲にとっては、それは驚くことでも驚かないことでも、要はどちらでもなかった。

まるで、煙草の煙を吐くと同じようなことだ。

「この程度、こちらとしてはまだ観測するくらいで丁度いい。たかだか人間が数十人死んだくらいで、秩序はそう簡単に乱れない。発現したことで既に通常ではないことは分かるが、『これ』はまだ正常の範囲内だ。それくらいは、分かるだろう?」

「ふっ……そういうことだな。そういうことに違いない。まさしく正常。言う通りだ。オーケー。それじゃ、観測レベルをもう一段階上げるとしようか」

と、そこで氏咲は感付く。

あらゆるシチュエーションにおいて、沈黙は語りかけてくるものだ。特に、幻の場合はそれが顕著であるので、氏咲にとってはある意味言葉を用いたそれよりも雄弁に感じることもある。

それが今であり、そして今であった。

「……いや、だが好きにやっていいぞ。俺は動かないだけだ。お前と彪の二人なら大概の奴に太刀打ち出来るだろう。俺が出るのはあの三人の内いずれがca現れた時だけだ。……だが、万が一、兆が一、ソイツらがお前達の前に現れたら、とにかく連絡を寄せ。それ以外は知らん。勝手にやってくれ」

「はあ……でも一週間以内には出るとか言ってたけど、そこんことどうなんだ?」

「この調子で行くと『そうなる』。『そうならない』場合は『そうならない』場合でしかない」

「了解」

そう氏咲が言い終わるや否や、通話は切れ、無機質な電子音がこの世の終わりの残滓のように、氏咲の耳に、体内に、宇宙に、土足で進入する。

あまり一方的に電話を切られることを快く思わない氏咲は、こればかりは仕方ないと諦めつつ一人肩を竦める。

相変わらずテレビはCMも挟まず延々と現場の生中継を流している。

『ああ、気持ち悪い』。『だから何だと言うのだろうか』。

氏咲はテレビを消し、代わりにCDコンポの電源を入れる。グノシエン又第一番。ただそこにある家具のように、忽ち旋律は部屋に浸透する。

待ち受け画面に戻った携帯電話を再び操作し、耳に当てる。

「……………もしもし？ ……ああ、まだ動かなくて良いとお達しだ。とりあえず引き続き『姫』の護衛を頼む。もう少しの辛抱だ。

……………は？ 金がない？ この前渡しただろうが。……………

……………お前これを期に食事回数減らせよ。体重増えない謎は置いとくとして、一日七食は異常だ。飯にも女だろ。もつとなんかこう色々考えろよ。……………ならとりあえず二時間後に【291：32：47：102】だ。……………ああ、健闘を祈る。汝に我らが母の加護があるんことを」

通話を切る。彼女はちゃんと節度を持って空気を読んで通話を切るから好感が持てる。彼女に対する好感と言えば、それともう一つだけだが。

ソファアーに身を沈める。顔には出さないが、氏咲は少し疲れていた。

そつだな……………そつ……………やるべきことは……………目の前にあり、気付いた時に訪れる。

家具の音が渦巻く。

どうせもうすぐ否応なしに混沌になるのだ。今から二時間くらい心を落ち着かせていても、世界はまだ回る。

もうすぐ当たり前が当たり前でなくなってしまうのだから。

その30 降下

降下 12 / 4 or 4 ?

手に兇器をもつて人畜の内臓を電裂せんとする兇賊がある。

かざされたとこの兇器は、その生あたたかき心臓の上におかれ、生ぐさき夜の呼吸において點火發光するところのぴすとるである。

しかしてみよ、この黒衣の曲者も、白夜柳の木の下に凝立する所以である。

——『蝶を夢む／柳』萩原朔太郎

「どうしたんだい？ そんなに急いで」

そうだ。ぼくは何をそんなに急いでいたのだろう。何をそんな急ぐ必要があったのだろう。

言われて初めて気付いたような錯覚に陥る。それはあくまで錯覚であり、ぼく自身がそう感知したかどうかは別物なのだ。つまりは、やはり『誰が觀測しているか』に依る。

例外はない。

「急いでたかな？」

「ああ、これ以上なくね。まるで世界が終わりそうな顔をしていた」

「実際そうなんだろうけど」

「なら尚更だね」

世界は本当に終わろうとしているのだ。

変化とは勿論目に見えるものばかりではない。寧ろ五感で感じる変化など所詮その程度であり、この世は見えないもので満ち溢れている。変化は常に物事の裏で起こっていることをもっと知るべきなのだ。

無論、気付いている人間は気付いている人間なりに活動を行う。多分それはまた、普通ではないのだろう。

「……………」

「どうしたんだい？ 君が黙り込むなんて珍しい」

珍しい？

珍しいとは何だ？

珍しいとはどういう意味だ？

「多分そういう尺度では測りきれないようなものだと思うけど」

「秩序だよ。君も分かっていると思うが、世界は整列されなければならない。整列とは静寂だ。今起こってしまっている事件も、君の沈黙も、その対極に位置する」

「静寂……………」

君は。

何をどこまで知っているというのだろうか。

ぼくの心中をよそに、睨込ろにかはいつものように微笑を絶やさない。それが彼女であって、他の何者でもない所以でもあるのだらう。

——…………『いつも』のように？

違う。もう変わってしまったている。第六感でさえも感じ取ることの出来ない事象が、ここには確かにあるのだ。

ならば、前に進むしかない。

だが、睨込はぼくの心中を見透かしたように話す。

その目は透明であり、硝子であり、虚無であって、全てが凝縮されていた。

そして彼女は言うだろう。——ぼくは知らねばならない。

睨込は髪を靡かせて振り返る。ぼくは立ち尽くす。立ち尽くす。立ち尽くす。

「さて、何を知りたい？ もうアレらが動き出したんなら秘匿義務も何もかもあったもんじゃないからね。動いていないものは何もおらず、全てのものは『何処か』に向かつて収束しているのは確かだ。それにもう、アレらに接触した君は一般人じゃない。まあ元々一般人ではないことには変わりないんだけど。ならば、故に、知らねばならない。——いや、知ることしか君には選択肢は残されていない」

「……………」

ぼくは少し思案する。これまでのことを。これからのことを。

知らねばならないことを。

「とりあえず訊きたいんだが、ぼくは襲われなければならなかったのか？」

「襲われる？ 何に？」

「え？」

「……………あれ？ いきなりそういうリアクション？」

出鼻を挫かれた感じがして、変に緊張していたばくは力無く息を漏らす。

どうということだろう。彼女がそういう反応を示すと、不安になる。それは彼女も同じようで、珍しく眉を顰める仕草を見せた。

「いや、ちょっと待って。……………違う。違う。……………変わっている？ ……干渉か」

ぶつぶつと口の中で対話を繰り返している。自分と自分で、問答を繰り返している。

それは打ち寄せる波のように、ざわめきだったり遠ざかったり。やがて、一点に定まる。

「……………そうか。そうか。そうかそうか。——だからか」

それは面白がっているように見えたが、ばくが初めて見る表情でもあった。

一息置いて、畚辺は愉快気に口端を吊り上げる。

「分かった——さて、それじゃ行こうか」

「は？ どこに？」

「『全て』に、だよ。それを君も欲しているんだろう？ ……兄様には悪いが、事情が変わった。これからはちょっと私のやり方でもや

らせてもらおうかな。と言つか兄様も人が悪い。いつまでも子供扱いさせられる身にもなっただけいいものだね」

畠辺はドアを開ける。それより先は光が、はたまた闇か。

「因みに訊くが、車の運転は？」

「出来るけど」

「上出来だ」

ビルには地下があつた。

地下には車があつた。

ただそれだけの事象。

「そう言えば、アレらって連呼してたけど、何のこと言ってるんだ？」

「気になるかい？」

「『そういう』のに対しては、ぼくは敏感なんだよ」

畠辺はぼくの言いたいことを一から九くらいまで理解したような目を向けて、若干口元を綻ばせる。

やはり彼女はそうでなくてはならない。

「『those』」

そう畠辺は言った。

単純明快に。

複雑怪奇なものをその一言に押しとどめて。

「世界を染め上げようとしている連中だよ」

その31 怒涛

怒涛 12/4or4 ?

迂闊だった。しかし、今更それを悔やんでいても仕様がな。時間
間は流れるものだ。それを止めることは私には叶わない。

まさか、とは言うものの、今となってはこちらの失態と認める他
なく、悔やんでいる時間すら一秒たりとも無いのが現実だ。

「杏梨」

「——『巢』に異常あらず。正常稼働。転送座標の誤差はゼロ。速
度は現状維持で支障無し。接触まで残り二十七秒、二十六秒、二十
五秒……」

機械のような杏梨の思念波を感じ、私は少しばかり安堵する。彼
女の冷静な声こそが、旋律こそが、私にとって最たる安定剤になり
得る。

そして瞬時に血が滾るのを認識。

思考よりも身体が意識を先行し、一が二に、二が四に、四が八に、
イメージが泡のように沸き立ち、発狂寸前まで神経が鋭敏且つ凶暴
になっていく。

兄さんがあの強襲を躲したのは偶然でも運でも何でもない。あれ
こそが兄さんの本質。無様に首を飛ばされ散って逝った登場人物に
もなれないその他大勢とは、存在の根本から違う。それが兄さんだ。
だが、そうであると分かっている、アレの犯した罪は決して赦
されるものではない。

「——殺す」

心臓の鼓動が呪詛の響きを携えて私に延々と囁く。それは止まることなく、まるで輪唱のように相乗効果となつて私に暗示をかける。アレは兄さんに手を出した。だから死ななければならぬ。どんな理由があつても、それによつて世界が滅ぼうとも、『やつてはいけない』ことは確かに存在し得る。

それが私にとっての普遍事項。それはあらゆる不条理を無効にする最大の道理。

「大それた真似してくれるじゃない——ッ」

感情的になるのは悪いことではない。寧ろ私にとってそれは麻薬であり、あらゆる感覚を過敏なまでに研ぎ澄ませてくれる。

どうやら『天庭』の奴らを出し抜くという考えが裏目に出てしまったか。ここまで向こうも表立った動きを見せないところからして、別の思惑があるのだろう。それか、泳がされている……？

「だけど、今はどうでもいい——」

何にせよ先手を取つたのはこっちだ。
このアドバンテージを逃す手はない。

「残り二秒」

杏梨の報告と同時に、人気のない路地裏を駆ける標的の背を捉える。距離にして五十メートル強。一息で詰めれる余裕の間合いだ。加えて相手よりも私は高所に位置する。既にお膳立ては万端だ。そしてきつかり二秒。

「ッ——」

全ての音を置き去りにして、最速を以て標的へ接近。

腕を払う。目の前で標的が四散する。その四散した欠片が更に四散し、その四散した欠片が更に更に四散四散四散四散四散四散四散四散四散四散——

「つ！？」

目を閉じる。その方が「見える」から。

視界の届く範囲でなくとも、今の私には全方位からの異質を感じ取る事が出来る。

「らあっ！！」

チクツと頬が裂けた感覚。だがそんな痛みの内にも入らない。その気になれば痛覚をシャットダウンすることも出来るが、それすら及ばない。

指の先端まで余すところなく、その一瞬だけ全力を入れる。そして寸分のタイミングを逃さず、その勢いのまま力任せに地面へと叩きつける。

轟音。

ビルの非常階段に着地し、その有様を俯瞰する。

「まだよ」

「分かつてる」

刹那の内に意思疎通を終わらせ、息の根を止めるべく標的へ最接近。もう幻術は効かない。

コンクリートが盛大に捲り上がり、砂埃が濛々と舞っているが、今の私にはそんなこと関係無い。『見える』のだから。

「解析済んだ？」

「——零式くるる。新顔ね。だからと言って油断は禁物よ」

「私が油断？ 新しいギャグ？」

「そのままそっくり返すわ」

途端、周囲の温度が一気に下がる。勿論感覚的なものに他ならないが、鳥肌が立ったからと言ってそこから一步も動けないわけじゃない。

寧ろ正常な危険信号。私の身体は私が一番理解している。

ああ——『見える』。前後左右上下から無数の鋭利な刃物が私に標準を合わせているのが。だけど、

「トロいし物量不足ね」

「確かに」

放たれると同時に、その場から飛び降りる。
防御はしない。戦闘において最も大切なのは目的を見失わないことだ。

故に一点突破。ジャケットやスカートが破れ、身体中に切り傷が出来るがそんなこと知ったことではない。
瞬時に集中。静寂を創り出し、疑似的に時を止める。

「——捉えたッ！」

壁を蹴り、軌道を修正。弾丸のように標的——零式くるるの元へと直行。

今度こそ息の根を止めるべく、先程引っこ抜いた非常階段に設置されていた転落防止の鉄格子を二本、零式に投げつける。

投げつけた時の風圧で砂塵が完全に晴れる。一本は弾かれたが、もう一本は零式の腹部を貫いているのを確認。
そしてトドメ——

「!？」

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

「……油断は禁物って言ったじゃない」

「……………してないって」

「結果が全てよ」

「まあね……………」

アレは全力ではなかった。そう認識してしまったからには、結局のところ慢心なのだろう。

では次だ。

私はまだ赦していない。

万死に値する罪の償いはまだ始まってすらいない。

「杏梨」

「ええ。それじゃ、次のフェイズへ移行しましょう」

その32 上層

上層 12 / 4 or 4 ?

「……全く、手のかかる『姫』だ」

何もかもは目の前に現れる。前触れはない。そして川の流れのように、穏やかに、しかしどこか無秩序のまま進んでいく。

だから初対面だからと言って、フィクションでよくあるように自己紹介から始まるわけもなく、ただそのまま受け入れることだけが推奨されており、許されている。現実はそのなのだ。隣の誰かも知らないところから、物語は始まる。

前だけ向いていればいい。それは決して『前向き』な言葉などではなく、普遍の真理でもある。

そこから世界は開ける。

「で？ どこに行けばいいんだ？」

「……もう少しの間適当に走らせといてくれ。ガソリンは満タンだから、ガス欠の心配はしなくていい」

「適当ねえ……難しい注文だ」

「行き先がどうしても必要かい？」

「あまり目的も無くうろろするのは趣味じゃないんだ」

「人間らしいね。人は無意識の内に行き先を定めないと生きていけないようプログラムされている」

車に備え付けられたFMラジオからは、まだ引つ切り無しに例の『現象』の臨時ニュースが流れている。まるで正常に壊れたオルゴールのように。

言われるがまま車を走らせること十数分。歩くのと違って車で彷徨うように移動するのは実際やりにくいことで、とりあえず今は行きつけの堤防へと向かっていた。

そこからどうするかは知らない。

ぼくは今、海を見たい。

それだけのことだ。理由なんて、志向性なんてそんなものだ。

畚辺はさつきから助手席で忙しく携帯を弄っている。『何』をしているかは分からないが、『何か』をしていることは分かった。メール……ではなさそうだ。調べ物だろうか。どちらでもいいが。

キャスケットに隠れて彼女の表情までは読み取れない。それにしても帽子が良く似合う。

ぼくは無駄な思考を止め、少しでも力を抜く。

それに一生こうしているわけでもないだろう。結局はどこかへ行き着く。

「一つ、訊いていいか？」

「どうぞ。私は何も拒まないよ」

手前で信号が赤になる。

ブレーキを踏み、車が静かに減速する。

「何にせよ、ぼくらはどこかへ着く。それ自体はどうでもいい。問

題は、ぼくにそれが関係あるかどうかだ」

「君に、それが、関係あるかどうか」

畠辺は、目隠しして口に含んだものの味を確かめるように繰り返す。

「関係、ねえ」

笑み。キャスケットから覗く流し目でこちらを盗み見るようなその仕草は、ミステリアスで、妖艶で、複雑怪奇であった。

返答に窮している、というわけではなさそうであるが、言い淀んでいる感が滲み出ている。それとも——ぼくが理解できていないだけか？

「関係がなかったら、知りたくはないのかい？」

「極力はね。何事も、過ぎたるは猶及ばざるが如し、さ。ぼくが一般人であった場合でも、一般人でなかった場合でも、ぼく自身の主観は揺るがないし変化しない。そんな超越的な場からの干渉なんて受けたところで、面倒だし扱いに困る」

信号が変わる。アクセルを踏む。微弱な慣性がかかり、背凭れに身体が押しつけられる。

これだって分かっていること。それは便利であり不自由である二重背反。

問題は、青であるのか、緑であるのか。

「成程。まあそれでも君の意思が尊重されるとは限らないんだけどね」

「……………」

「正直なところ、これは緊急事態なんだ。私にとっても、君にとっても」

「まあ逼迫しているのは理解出来る。その、『those』ってやつらのせいで」

畠辺は頷く。

「その通り。世界を終わらす、ってのは比喻でも何でもないんだ。彼らにとってはね。初期メンバーは五人だが、十中八九数は増えているだろう。あれから十年も経っているから」

「あんなのが五人以上……？」

本当にアレがどこまであの『現象』に関わったのかは理解の及ぶところではないが、少なくとも人間離れた『何か』を持っているのは疑いようのない事実と捉えて良いだろう。

現時点で被害者は六十三人であり、これからまだ増えるだろう。ギネス記録も間近だ。

「……こんなところでドライブに興じていていいのか？」

「おや、柄にもなく焦っているかい？」

「分からないことは怖いんだ」

「まあ道理だ」

とは言え今のぼくは畠辺についていく他ない。ぼくをそうさせたのはぼくでしかないが、一旦舟に乗るとすぐには降りることが出来ないのも道理だ。

「でも何とかする。そのところは安心してくれていい。当面はね」

畠辺は二つ折りの携帯を閉じ、一息吐いた。

「そんな君に朗報だ。行き先が決まった」

「ここ数時間で一番ホツとした気分だよ」

畠辺は身を乗り出し、カーナビに住所を素早く入力する。目的地がすぐに画面に表示される。そこはここから一時間ほど走らせた場所だった。

思いつきり県外である。

堤防とは逆の方角だった。

適当なところでUターンさせ、カーナビの声に従い目的地へと淡々と距離を縮める。

「ちょっと遠いな」

「車で一時間なんてあつという間さ」

そう言ってシートに身を委ねる。

「それに、今はここから離れた方がいい」

「緊急事態だから？」

「それも、ある」

暫くして県境を示す標識の下を潜る。
畛辺は助手席でうとうとし始めている。
未来は肅々と展開を見せている。

その33 越境 ？

越境 12 / 4 o r 4 ？ - 1

遠くに行く、という行為は精神を安定させる。見知らぬ土地は自分をリセットさせ、あらゆる枷から一時的に解放される『コード』が埋め込まれているからだ。

だからぼくは旅行が好きだ。電車で移動するにせよ、車で移動するにせよ。徒歩で移動するにせよ。

ぼくが完全といっても差し支えない程度に落ち着きを取り戻した頃には、もう目的地は目と鼻の先であったが、この辺は道が入り組んでいるようで到着まではあと少なくとも五六分はかかりそうだった。

雰囲気は畠辺の住んでいる区画と似ており、同じようなマンションが乱立しているが、ここはまた別の『におい』がした。

空が曇っているからだろうか。少し雨が降りそうだ。そのせいもあるかもしれない。

今何時だろう。どうでもいいことが一瞬頭を過ぎる。

——どうでもいい？ 今何時であることが？

「馬鹿馬鹿しい」

自分の置かれている立場を多角的な視点から確認するのは必要なことだ。ましてや、現在時刻なんて最たるものであるのに。思考がまとまらない。

「ん……ふあ……着いたかい？」

畠辺が目を擦りながら欠伸交じりでぼくに訊ねる。

「もう着くよ」

ハンドルを右に切る。あと二回左折すれば到着だ。と言ってもそこがどんな所なのか知らないで、目的地が近付いているという実感はあまりない。住所ではその一点を示しているが、そこに行つて何をするかさえぼくはまだ知らない。

知らないことだらけだ。だがそんな悪い気はしない。人はいつだって新鮮さを求めている。

既知は、毒だ。

退屈が劇薬であるのと同様に。

「ところで君、自宅に未練はあるかい？」

「うん？」

自宅？ 何だつて唐突にそんな質問を？

「自宅がどうしたつて？」

「いや、もう帰れないかもしれないからさ」

「……はい？」

その33 越境 ？

越境 12 / 4 o r 4 ？ - 2

「……あれ？」

「どうしたの？」

おかしい。

ドアを開けてすぐに異変に気付く。

何故帰ってきていない？ あんな事件に巻き込まれた後だと言うのに。

玄関に靴はない。兄さんに靴を靴箱の中に入れる習慣はないので、家にいるのならすぐに分かる。

それにもう昼過ぎだ。今朝に私は兄さんに昼ご飯はいるかどうか訊いた。兄さんは数秒思索して、じゃあ頼む、と答えた。兄さんは安易に約束を破ったりしない。だから私には兄さんしかない。

リビングへ移動する。誰もいない。当たり前だ。靴が無かったのだから。

いない。『おかしい』。こんなこと、予定にない。

「……………杏梨、『巢』を起動。大至急兄さんの現在地を補足して」

「——了解」

心の中で舌打ちする。どうしてあの後兄さんの動きを追わなかったのだろ。完全に『those』の輩に目を奪われて失念していた。そうだ。それよりも、あれよりも、大切なことを、大義を見失ってどうする。

自業自得であるが故に、行き場を無くした苛立ちが蟠る。

心がざわめき立つ。無事であることは言うまでもないだろうが、やはり想定外の事態に陥ると安心は出来ない。

十数秒後、杏梨の目の焦点が合う。

「補足完了——あ」

だが、その言葉は不自然に途切れる。

すぐに二の句を継がない杏梨。また想定外だとしても言うのか？

「？ 何か問題発生？」

「——ロスト」

「何？」

ロスト。見失った。つまり——

「穂都万市から外に？」

「ええ。今まさに、ね。明らかに徒歩のスピードじゃなかったわ。自転車でも無理があるわね。となると——」

「家に車やバイクなんてないんだけど」

「なら誰かなのでしょうね」

「誰か——？」

拉致られた——可能性は捨てていいだろう。何しろ兄さんだ。そ

んな普通の人間のような過失は犯さない。故に脅されて云々の可能性も然りだ。これは、十中八九兄さんの意思によって行われている兄さんの意思？ それはつまり、『場の流れ』がそうさせているということ。

今兄さんと接触し得る人間は限られている。その中で一番可能性のある人間——炙り出すのにそんな時間はいらぬ。

「……何それ」

「カ。ログ」

「。レログ？」

「兄さんの携帯の位置情報とか電池残量とか通話記録とかが分かるアプリ」

「え……………」

隣で私のiPhoneを覗き見ながら絶句している杏梨を放っておいて、とりあえず兄さんがどこにいるかを大至急調べる。

「そんなのあるんなら、別に私の『巣』での搜索いらなかったんじゃないの？」

「何言ってるの。これは兄さん専用なんだから。『those』が近いいたり、そういった副次的検索は貴女にしか出来ないんだし」

……………見つけた。

やはり……………あの女か。

睨みろにか。

想定は収束した。ひとまずは安心と言ったところだろうか。

「えらく遠出してゐるわね。県外じゃない」

ディスプレイに表示された地図に浮かぶ、兄さんを表す点滅する赤い印を見て、杏梨が呟く。

「でも、追跡不能な距離じゃない」

「今すぐ出発？」

「勿論」

その33 越境 ？

越境 12 / 4 o r 4 ？ - 3

「あ、ここで止めてくれ」

目的地に着き、車を降りると一瞬ぼくは目を疑った。

以前訪れた畚辺の『家』と全く外見が変わらないビルが、そこには聳え立っていた。

「狐に化かされた気分なんだけど」

「じゃあ多分狐に化かされたんだろうよ」

車を隣のモータープールに停め、畚辺の後についてビルの中に入る。

ロビーは相変わらず無機質な『箱』だった。昔、数人の無関係の人間が無数の『箱』の中の一つに閉じ込められて、その迷宮から脱出しようとする映画を見たのを思いだした。まだここから自由に動けるだけ、ぼくらはマシなのかもしれない。

どこかうそ寒い空気を感じながら、エレベーターに乗る。

三十二階。二十秒もかからずに到着。本当にこれは上へ向かっているのだろうか。下に向かっていたとしても、ぼくは何ら不思議には思わない。右だって左だってそうだ。ぼくは軽く目眩を覚える。

エレベーターのドアが開くと、真っ白な空間の突き当たりにもたドアがあった。

ドアの前にはメイドがいた。メイド服を着ているのだから、それ以外に何を連想すればいいのだろう。

畚辺よりも明らかに年下のメイドは、優雅な仕草で、しかし精密

機械のような動きで、お辞儀をする。

「お帰りなさいませ、ろにか様」

顔を上げると、ウェーブのかかった前髪の間隙から覗く三白眼がぼくを射抜く。

「ただいま、ヴァネッサ」

外人のようだった。

物語はそうして歪みながら、しかしどうしても進んでいく。後戻りはもう出来そうになかった。

その34 白磁

白磁 12 / 6

出る杭は打たれる、と言う。だからぼくは出来る限り目立たないように生きてきた。そう自覚はしているし、多分間違いないこともある。

しかし、物事現象風習空気は両端に延びる。それは、目立たないことは目立つことを意味していた。そして目立つことは当然目立つことだ。

誰に？ 誰にでも。いつでも。どこにでも。

結局どこに行っても逃げることは叶わなかったのだ。それなら最初から諦めるという選択肢もあったが、それはそれで馬鹿馬鹿しい。どこの世界に迷路の入口を出口と勘違いする知的生命体が存在するだろうか。

——息が詰まる。

——閉塞感。

何故、ぼくを見る。

何故、ぼくを。

何故、『ぼく』を——

「おい、さっさと起きろニート」

ヴァネッサの幼げなハスキーボイスでぼくは目覚める。発見という程のものではないが、彼女はぼくと睨みとで態度が全く違う。彼女と出会ってから時間にして半日も経っていないが、ぼくは罵倒における無限の可能性を見出しつつあった。

ベッドから降り、独房の『ような』部屋を出て、リビングの『ような』リビングに顔を出すと、畠辺が既に朝食をとっていた。

この部屋には——いや、おそらくどの部屋にも——窓はない。それは外が見えないということだ。故に時間が分からない。あらゆる基準は自然からもたらされる。それなのに今が午前八時二分であることが、十二月六日であることが、二〇〇九年であることが、『三度目』であることが分かるのは、この部屋の壁に無秩序に無作為に無数に掛けられた時計が証明している。

ぼくは創られた時間を漂いながら席に着く。

広いテーブルを挟んで、畠辺の向かい側の席に着く。

「君結構起きるの遅いんだね」

「ぼくにとって午前中は朝なんだよ」

ヴァネッサが朝食を運んでくるので、彼女が作ったのだろう。メイドだけあって、文句のつけようがなかった。

セミロングのストロベリーブロードを翻しながら部屋を後にするヴァネッサを眺めつつ、ぼくは畠辺に訊ねる。

「で、『これ』はどういうことなんだ？」

骨董品のようなティーカップを口元で傾け、畠辺は挑戦的な目付きでこちらを見る。

まるで事実がぼくの背後にあるとでも言いたげに。それもまた事実なのだろう。

「とりあえず応急処置というわけさ」

「応急処置」

「そう」

「つまり問題はこれからだ、と」

「やはり君との会話は『つながり』が淀みなくて感動すら覚える」

畠辺は足を組んで、手を組んだ。そして両肘をテーブルに置いてぼくを見据える。

「知つての通り、ここは『狭間』だ。どこにでもあつて、どこにもない。故に私の常識内では何の干渉も受けない。完全な対策にはなっていないだろうが、今言つたように応急処置にはなっている筈だ。私が創つたものだからね。目眩まし、というヤツだ」

「あのヴァネッサって娘は？」

「うん？ 気になるかな？ まあどうということはないよ。少し前に私が拾つた吸血鬼の成り損ないだ。頓着することでもあるまい」

……余計ややこしくなつた気もするが、それもまた気のせいだろう。世界は思っている以上に広い。吸血鬼の一人や二人いなくてどうする。

一つ確かなことは、あの謎のターミネーターからは一時的に身を隠している、ということくらいだろうか。畠辺の様子から見て、おそらくここは絶対的に安全なのだろう。特に理解する必要はない。起こっていることをただ受け入れればいいのだ。

だが、それで納得するかどうかは別の話だ。

ヴァネッサが音も無く部屋に入ってきて、畠辺の側につく。ぼくの方には目も呉れない。

彼女達は小声で二言三言言葉を交わす。

「ふうん……じゃあ、アレは捨て駒ということかな？」

「恐らくは。場を引つ掻き回す程度の存在ですね」

「君の目から見たら？」

「人間離れしていますが、所詮『人間』です。『those』全体から考えるとただの雑魚でしょう。無論、私にとっても」

「良い答えだ」

何気に自信たっぷりと答えるヴァネッサを見ると、ふと目が合った。

「何見てんだ屑」

彼女は二重人格なのだろうか。

「じゃあ引き続き観測を頼もつかな。いつだって場を制するのは大局を制するものだからね」

「あ、それともう一つなのですが——」

ヴァネッサは睨みの耳元に口を寄せる。

数秒後、睨みの表情が静かに変化する。どういつ風に変化したのかは分からない。それは雰囲気なのかも分からない。とにかく、何かが『変』わった——もしくは『変』わるうとしていることは確実であった。

ぼくにさえ感じ取れる。畚辺にとつては、心の内で奔流が湧き起こつていても不思議ではない。そして、目が細められる。

「全く。君は私を退屈させはしない」

二人の女がぼくを見据える。

無数の時計のどれかが、鐘の音を鳴らし始める。

今何時であるか。やはりそんなのはどうでもよかったのだ。

その35 追跡

追跡 12/6 i?

みんな変わる。みんな変わる。
そしていなくなる。

——『不明』不明

——八時間前。

「これは……ちょっとお手上げね。位階がズレてる。空間転移くらいならどうにかなるだろうけど、流石に私にどうこう出来る代物じゃないわ。まさか座層まで操作出来るなんて………こんな捻曲がった空間に無理矢理干渉しようとしたら存在自体が消滅しかねない。残念だけど、作戦を練り直す他ないわね」

「そう——分かった。お疲れ。とりあえず駅前で合流しようか」

「了解」

杏梨との通話を一旦切り、私はコートのポケットに両手を突っ込んで空を仰ぐ。

空。私の場合それは漆黑だ。いつだって空は黒い。海が青いのなら、空はその対極でなければならぬ。故に月は穴だ。月が人を狂わせるのはその所以だ。

吐く息が白い。そう言えばもう十二月だった。

この前の十二月はどうだっただろうか。……いや、そんなものは

ない。ないものはない。私の十二月は『この』十二月でしかない。
ならば、ここできつちり終わらせなければならぬ。そのために
待ったのだ。十年も。

それにしても……

「……意外に積極的だったなあ」

畚辺ろにか。まさかここまで強硬手段に出るとは、少しばかり予想外だった。一応同じ学校だったこともあり、それなりに人となりは分析していたのだが、所詮上辺ばかりを見せられていたようだ。正直彼女の行為としては、まだ何も知らない兄さんの身の安全を考慮すると決して間違っではないのだが、如何せんスタンドプレイに走っている節は否めない。

そもそも彼女のバッグには『天庭』があるのだ。それに頼らないところを見ると、どうやら向こうは向こうで軋轢が多少なりとも生じているのだろう。

『天庭』は『天庭』で、別の動きを見せている。それがブラフならば、それはそれだ。味方の少ない私達には、前を向くことで精一杯なのだから。

畚辺幻。あの男も素性が杳として知れない。元『天庭』だった杏梨でさえ、その素顔すら見たことがないほどだ。メンバーを抜ける時に当時のデータベースを根こそぎかつぱらって来たにも関わらず、トップの彼とナンバー2である彼の旧友とされる氏咲松久の情報だけほぼ皆無に近い有様だと聞いている。

「ま、今んとこ敵と言えないだけまだマシか……」

決して味方とも言えないのだが、そんなことを考え出したらキリがないので思考を強制的にこの辺でシャットアウトする。

今はとにかく、目先の問題を考えよう。

「つーかそんなことより兄さん自身のことだ。畠辺さんに拉致られた兄さんは少なくともこの晩確実に家に戻らないだろうしと言うことは場所はどこであれ二人で一晩を共にするってことになるイコールつまり故にならばいい歳した男女が兄さんとあの女が兄さんが兄さんが兄さんが私の知らないところでこの私を差し置いてこれからの長い夜の間アレをナニしてどうなっ

」

近付くバイクのエンジン音。

減速しながら私の横で止まり、杏梨がフルフェイスを取って髪を振り乱す。

「ふう……お待た……せ……？」

「あ、お帰り」

「……………どうしたのそんな殺気立って」

「気のせい」

「そ、そう……」

よく分からないが多少顔を引き攣らせている杏梨はさて置き、私はこれからのことを考える。

考えることは大事だ。この十年間、料簡に料簡を重ねてきたのだ。瑣末なことですら、私は考える癖がついてしまった。

「杏梨から見れば、現時点手立て無しのお手上げ状態ってわけか」

「そうね。何もしないよりはマシ、とはよく言うけれど、アレは何かしたところでこっちに危険が及ぶだけね」

そうか。『なら』――

「強行突破とかわけの分からない奇行は止すことね。言うておくけれど、貴女と彼女とではまだ能力の開きに無限の差がある」

「……………まだ何も言っていない」

「意思疎通って言葉知ってる？」

「便利な言葉なこと」

「そっけないことね」

私は溜息を吐き、再び空を見上げる。

相変わらず、不気味な金色の眼が私達を、世界を、見下ろしていた。

「けれど」

地上に目を戻す。

あまり聞かない、力強い声で杏梨が続ける。

「八方手詰まりになったわけじゃないわ」

登場人物ver.2 and 作中用語

登場人物みたいなもの

睽辺ろにか（あらたべ ろにか）：少女。世界を統べ、世界に殺される。全にして無。天の器なる者。

霧江五樹きりえ いつき：青年。万能。友達皆無。Kyrios.

霧江常夜きりえ とこよ：五樹の妹。五樹こそが世界。五樹の連絡先を知る人物その1。

睽辺幻あらたへ まぼろし：ろにかの兄。旧支配者。『天庭』総領。第二の天。

氏咲松久うじさき まつひさ：最後だった人間。『天庭』のNO.2。幻、彪の旧友。

椿彪つばき あや：幻、松久の旧友。世界に捨てられた女。

価々無杏梨：かかなし あんり常夜の手足。常夜の愛人。元『天庭』メンバー。

ヴァネッサ・オルベラ：ろにか専属メイド。不完全な吸血鬼。

零式くるる（ぜろしき くるる）：白紙の終焉者。『those』
序列10位。

又迦己被幸哉：さかきほら こひや悪魔になった人間。地獄そのもの。『those』
序列7位。初期メンバー。

凰鹿那岐：おうか なぎプログラムされた創造者。アーキテクト矛盾。『those』序列6
位。初期メンバー。

皇周：すめらぎ あまね愛の左腕。魔女。『those』序列4位。初期メンバー。

円上神威^{えんじょう かむい}：愛の右腕。人間でもなく神でもない異物。『those』
序列3位。初期メンバー！。

月見坂愛^{つきみざか あい}：ろにかと対になる少女。世界を呪う。現『世界』支配者。
『those』序列1位。初期メンバー！。

用語

『天庭』：睺辺幻率いる前世界での生き残り集団。目的は『those』の壊滅。

『those』：月見坂愛率いるこの世の理を外れた異能力軍団。
目的は『天庭』の壊滅。

『霧江一族』：イレギュラー。第三勢力。

その36 軌道

軌道 12/6 i?

深夜——時

胸騒ぎ、とは決して気のせいなどではない。あらゆる知生体は万象とアクセスしており、要は意識をそこまで意図的に潜り込ませることが出来ないだけだ。ただ多大な影響を及ぼす事象振動が発生した時、まれにその揺らぎが最上層の意識レベルにまで届くことがある。

そんなわけで俺は起きた。

部屋は暗い。いつしか日は暮れていた。

同時に電話のコール音が、コンポから流れるメトロノームのようなピアノ音が無粋に踏み荒らす。この時点で俺は不快を感じる。

電話がかかってくる。それは俺にとって不吉の予兆でしかない。いかなる時でも。

電話は期待と共に取るべきではない。

「もしもし」

相手は彪だった。

「何だ？ 食費なら昼に渡しただろう。まだ食い足りない………はいはい分かった。分かったから食いながら喋るな汚らしい。とりあえず要件を言え。手短にな」

彪は言われた通り手短に、的確に、用件だけを告げる。俺は彼女のそういうところが気に入っている。要望に応えてくれる女は良い女だと相場は決まっているのだ。

「——そうか。……少し面倒だな」

口ではそう言っているが、知らず俺の口端は釣り上がっている。

俺は深く息を吸う。

やはり——絡んできたか。キリエの眷属共。

全く、こちらが意図しなくてもシナリオを引つ掻き回してくれる。幻も困った奴らを相手に回したものだ。

「……ふん、あの女のカキか。……早いものだな、もう十年経つかえらくジャストタイミングで動いてきたものだ。なかなか根に持つタイプか？ あのカキ」

いや、もうあのガキも立派な女だろう。人間の幼年期から青年期における十年は世界を変える力にすらなり得る。現に彪の監視によると、『those』の一人と一戦交えたようだ。恐らくは、あの首切り魔だろう。

どこの馬の骨とも知れない奴ではあるが、『those』であることは疑いない。彼女がアレらと対抗し得る力を備えるまでに成っていることに、俺は込み上げてくる笑いを静かに抑える。

……面白くなってきた、と言えば幻は不愉快に思うだろうか。

ああ、これだから思い通りにいかないことは、生の実感だ。

俺は今生きている。

さて、次は何が起こる？ 何をしてくれる？

「——ん？」

一瞬、世界が凝固するのを感じる。それは彪にも伝わったようで、たった一語だけだがめったに出さない俺の困惑した声色を受けて、一段と声を低くして訊いてくる。

俺はドアを見る。この部屋と外界を繋ぐ唯一のドアだ。

凝視。

……何だ。

何だ何だ。

それで隠しているつもりなのか？

「……………ああ、気にするな。とりあえずこれで通信は一旦切るが、最後に伝えておくことが発生した」

どうやって、といった疑問は最早愚問だろう。あらゆる事象は為るように為るしかない。誰もがそう思う時、初めて世界はもう一つ上の段階にシフトすることが出来る。

全てを押し並べて受け入れることで、ようやくスタートラインに立つことが許される。

さあ、お前はどうか？ 彼は？ 彼女は？ あの——は？

そして、俺は静かに告げる。

「甲種限定解除だ。引きつけるから速やかに対象を見つけ次第排除しろ」

同時、ドアが音も無く十字に切断される。

瞬時にして四片と化した鉄屑が、一秒を十ほど刻んだ時間差で、弾丸の速度を以てして俺の方へと飛んでくる。

「——ッ」

迷うことはない。

腕を伸ばす。最初に到達した一片を、粘土を掴むようにして手に馴染ませる。

五指を喰い込ませ、捕らえる。

あとは弾くだけ。簡単なことではない。

右に。

左に。

上に。

一秒の十分の三の出来事。

それでも余りある時間であることは言うまでもなかった。

外界と隔てるものがなくなった、そのドアのあった空間から、長身瘦躯の赤髪のそれは顔を出した。

現人悪魔。地獄の具現者。永久凍土。

又迦己被幸哉。さかきほろこじや

「よう、久しぶりじゃねえか。まだこんなミミっちイことしてんのか？ 飽きねえ奴だな。哀れすぎて泣けてくるわ」

「……第五位はやっぱりパシリか何かみたいだな。こんな所まで御苦労様なことだ」

又迦己被は十年前と全く変わらない表情で、邪悪な顔を更に陰険に歪ませる。

「はっ！ 相変わらず口の減らねえ野郎だ。そんなんだから、俺に執着される。——因みにもう第七位だよ。上にバケモンが二匹も入っちまってご覧の有り様だ」

「ほお……」

上に二人……ときたか。

やはりあの時とは全然勝手が違っているようだ。やはり千里眼の
価々無を見す見す逃がしてやったのは間違いだっただろうか。ウチ
には他に適役の人材がいない。

「二位も下げられたとあつちやご愁傷様だな。それでも月見坂の支
配から逃れ得ないお前の方が、よっぽど哀れで救い様がなさそうに
見えるが」

「ああ……そうだな。そうだそうだその通りだ。いいねえ、お前。
やっぱり分かつてる。お前だからこそ、分かるんだろうなあ」

「にしては嬉しそうじゃないか」

「ああ？　ああああ、そりや当たり前だろ」

トントン、と爪先で靴を鳴らす。
旋律だ。

それは合図であり、記号であり、精神であり——行動だ。
身構える。

動作は、すぐに来る。

「こうしてクソイラつくテメエをやつと縊り殺して溜飲を下げるこ
とが出来んだからよオ！」

ズン——！　と振動。

そして気持ちいいのいいものではない浮遊感。——いや、実際に浮
遊している。

床が——崩れていく。

世界が、抜け落ちていく。

俺にもようやく、終わりが幕開けたようだ。

「じゃあ、あの時の続きをしようか」

崩れ切って落下していく床の瓦礫の向こうから、あの時を想起させる声が響いた。

その37 進展

進展 12 / 6 ?

「さて、整理をしよう」

腕を組んだ睺辺はぼくを見据える。

もう時間の概念について、ぼくは考えるのを止めた。改めて見ると、壁時計は全て違った時刻を指している。針が逆回転している時計もある。最初に入った時、ぼくはどこで——いや、どうして具体的な時間を見たのだろうか。

それはやはり、囚われていることに他ならない。ぼくはこの期に及んで、まだどこかで秩序だった具体を世界に求めているようだった。

この場では最早、そんなことは何の意味も持たないことを頭の片隅で理解しながら。

「長らく待たせて済まなかったね。けれどあまり悪く思わないでほしい。こうなることも既に前々から予想済みだったんだ。加えて、予想済みだったことも既に予想済みだったこともね」

「ああ」

分かっている。全て分かっている。

ぼくは頷く。頷くことで、全てを理解し、掌握する。

「今現在、宇宙、もとい 世界 の座をかけて二つの勢力が鬩ぎ合っている。それくらいは知覚しているだろう」

ぼくは肯定を無言で以て返す。

「この世界は三度目らしい。『らしい』とは私でさえそこまで正式に情報権限が与えられていないのだが、まあその辺は軽く聞き流してくれていい。問題は『今』だからね。どうであれ、こうであれ」

「……………」

「勿論他の人間は認知どころか違和感すら覚えていない。当然のことだろうね。彼らは——少なくとも私達の基準で『普通の人間』に分類される知性体は——誰一人として先立って己を認識したものはいない。この世界の常識だ。恐らく君もそうであるだろうけど、実は違う。君は意図的に『逸らされていた』のだから」

「——とりあえず、簡潔に言つと……」

ぼくは早々と守りから攻めに転じた。正直畚辺に話の進行役を——任すると、宇宙の寿命が尽きてもまだ本筋から逸れた話をするに違いない。ぼくはそれを本能的に感じ取った。

ヴァネッサは相変わらず畚辺が座る椅子の脇で、優雅に佇んでいた。メイドたるもの、立ち居振る舞いからして様になっていなければならぬ。ぼくの目から見たら完璧の域に達していた。ぼくは昨日の——いや、ここでは敢えて眠る前の、と言っておこう——第一印象で、中学生くらいの見た目故に少し小馬鹿にした目付きで見てしまったことを、心の中で詫びた。

「——ッ」

睨まれてしまった。

「その二つの勢力つてのは、『those』とかいうのと、君らの集団なわけだね？」

「……正確には、私の兄が仕切ってる組織だけだね。——『天庭』。二番目の世界の生き残り集団さ」

畚辺幻。

一度だけ会ったが、正直生きてるのか死んでるのか、動いているのか止まっているのか、生か負なのか良く分からない男だったのを覚えている。

畚辺は少し表情を歪ませている。珍しい兆候だ。

「正直なところ、私もこの世界での記憶しかない。全ては兄が仕切っている上に、私にはあまり喋ろうとしてくれない。ただ一つ言えることは、前の世界は滅びた、という厳然たる事実だね」

「……護る側に関しては、あまり疑問を持つ余地はないんだけど……結局『those』って何なんだ？ 何をしようとしてることにすら分からないのか？」

畚辺は足を組み直し、物憂げに溜息を吐いた。

「『天庭』の排除。私を知るのはこれくらいだ。何にせよ、この世界の最後の防波堤は『天庭』に他ならない。彼らが破れた時が、三度目の世界の崩壊に繋がるだろうよ」

成程。荒唐無稽もいいところの話だが、実際筋自体は通っている。そこには矛盾がない。それだけで、出来事としての整合性は取れている。

ぼくは頷く。物事なんてものは全体のパーセントでも理解出来

たらしいのだ。

「分かった。『those』と『天庭』が 世界 を巡って戦っている。オーケー。ここまではいいでしょう。百歩譲ってね。だけど」

ぼくは再三思い巡らせていたことを言葉に乗せる。

「だからぼくは何なんだ？」

「……………」

全く関係ないわけではないのだろう。大小あれ、この世から関係を持たない存在などいない。関係を持たないということは、即ち存在しないことに繋がるのだから。

かと言って、このぼくの境遇はどういうことだ。

畚辺はぼくを見る。先月、初めてぼくに会った時に、ぼくに向けられた視線を、ぼくに向ける。

「…………霧江」

畚辺が、初めてぼくの姓を発音する。何故彼女が知っているかどうかなんて、この場では愚問にすらならない。

「私はこれでも一つの人間だ。誰かの傀儡であることなんて、死んでもゴメンだ。君はどうだい？」

急な問いかけに、ぼくは戸惑う。誰かに操られていることが、だつて？

そんなもの……良い気がしないのは確かだ。けど、どうして畚辺が……？

畠辺はこの時だけ、今まで見せたこともないような目付きで、ぼくを見た。鋭くもあり、諭すようでもあり、縋るようでもある目付きを。

ぼくは混乱した。

ぼくは出来る限り他人の思いを背負いたくないのだ。

「いいかい？ この先、あらゆる対象が君に干渉してくるが、いつだって自分の思うように行動するんだ。それが数秒後なのか、何万年後だろうか分からないが、決して忘れちゃいけない」

な、にを――

「はつきり言おう。君は切り札だ。有象無象が崩壊し果てても、君だけがそれをご破算にすることが出来る。それまで、自分の全てを誰にも委ねないことだ。それが例え、誰であっても」

畠辺は席を立つ。

ぼくは座ったままにいる。

「ろにか様、そろそろ――」

「分かっている」

ぼくに背を向けていた畠辺は、そこでもう一度振り返る。

「ただどね、私はシナリオ通りに動く気も、さらさらない」

そう言って、相対するものを嗤い飛ばすような、いつもの笑みを浮かべた。

そのXX - ?

XX - ?

『Wer mit Ungeheuern k?mpft, mag
zusehen, dass er nicht dabei
zum Ungeheuer wird. Und wenn
Ulanke in einen Abgrund blickt,
st, blickt der Abgrund auch in
dich hinein.』

『Jenseits von Gut und Bose』
Friedrich Wilhelm Nietzsche

—— 年前。

どこか。

そう。深淵はいつだって在った。そして俺は吞まれた。それ以来俺は『覗き込むもの』であり、『覗き返すもの』になった。

深淵は無限に広がっている。それは人間という宇宙の塵芥の更に塵芥にすらならない、存在というのも馬鹿らしい存在にとつてしてみれば、理解の及ぶ範疇でないことくらいは想像に難くない。と言うよりも、理解しようとしたその瞬間、思考が焼き切れて気が触れてしまうだろう。

深淵は方向すらない。絶えず膨張収縮しながらも、決して止まることはない。或いは常に停止している。あらゆる概念が、不定形の

まま散らかっている有様だと言っている。

闇が途轍もない質量で何もかも押し潰す。深淵に吞まれた者は、その瞬間闇と同化してしまう。その後は何も残りはしない。そう見えるだけかも知れない。そして、深淵は数えきれないほどの業を呑み込み、咀嚼し、嚥下し、濃い闇を更に濃くしていく。

その濃度に限りはない。全ては無限。無限は包括せざるものはなく、またあらゆるものを拒絶する。何故なら生も負も、『それ』にとつては一緒だからだ。

俺は吞まれた。そして、俺は同化した。

その瞬間、悟る。これが俺の在るべき姿であつたと。これが俺の為すべき姿であつたと。

ああ、そして悟る。——なんと醜いことか。全てを見渡せる位置に立つて、ようやく気付く。気付かされる。

五月蠅い。煩わしい。雑多すぎる。何故この世界はこんなにも色に満ちているのだろうか。一人が一人であることに、どれだけの意味がある？

俺はその一瞬の内に悠久の歴史を見た。そして今までの何億倍にも膨れ上がった思考の奔流が、俺という存在を絡め取る。

「……………駄目だな」

ここはまだ、完成していない。俺は直感した。

ならば、正さなくてはならないだろう。——正す？ 否、均す。そうすることで、何かが見えるだろうから。

——知り得たい。

俺はこのまま終わる存在なのか？ これが全ての果てなのか？ 最果てとは、こんなにもつまらないものなのか？

終わりが始まりに繋がるものであれ、それが真の終わりであれ、俺はこのまま終わらせるつもりなど毛頭ない。この意思がどこから噴出するものは分らないが、これが深淵の意思であると思えば

納得もいく。

彼も――俺を待っていたのだな。
故に――

「――邪魔だな」

そして俺は侵攻した。

これ以上、俺が望まざる世界を見せられるのは我慢ならない。

X年後。

俺は天を滅ぼした。

しかし、その代償は大きかった。

その38 課題

課題 12 / 6 i ?

時間は前後しない。

ここで起こっていることは、『今』という『現実』を支配していること以外に何も意味を為さない。

「一つ言っておくわ」

杏梨はパズルの最後のピースをそつと当て嵌めるようにして、付け加える。

「今から会いに行くのは『天庭』の实质No.3、私の『元』上司なんだけど……少し性格に難ありだから、くれぐれも刺激しないように頼むわよ」

「そんな発作持ちみたいな扱いしなくても……どっちにせよ私は面識ないんだから、交渉は貴女に一任してるし。——で、大丈夫なんでしょうね。その女は」

気持ち一オクターブ声の音程を下げ、私は訊ねる。

杏梨の言うことなのだから、間違いはないのだろう。しかし私は正直焦っていた。焦りと苛つきは紙一重だ。無力感は知性体の持つ感情の中で最も自我にダメージを与える。

兄さんが私の目の届かない所にいる。それは明らかに異常事態であるし、私の世界が閉ざされていることを意味していた。

睽辺ろにか。貴女はある意味で正しく、ある意味で間違っている。だけど、杏梨は私の心境を見通したように、淡々とした態度を見せる。

「ええ、私の知る限り、多次元干渉技術において彼女の右に出る者はいない。時間制限付きだけど、多世界移行すら出来るスキルも持ち合わせているわ」

「へえ……『天庭』にもそんなのがいるのね」

「あれはあれで人外魔境なのよ。私もね」

珍しく杏梨が自嘲的な笑みを零したところで、私達は立ち止まった。

始発から電車を三回乗り換え、バスで三十分。私達の前には特段大きくも小さくもない教会が鎮座していた。私はキリスト教徒ではないが、教会というのはその敷地内において異界を発生させているものだと思っている。神聖な場所、即ち聖域は確かに存在するものであり、いかなる形式を持つていようと、それは正負問わず人間のような影響されやすい普遍的法則を司ってしまう者としては、これこそ超自然的を感じざるを得ないのだろう。

斯く言う私も、そうであった。そうであらねばならないのだ。『だから』早く兄さんを取り戻さないといけない。

「ほう、何やら面白いことになってるじゃないか」

教会の扉を開けると、途端に女性の声が飛び込んできた。連なる長椅子には、一人の女性がこちらに背を向け座っている。

「——ッ！」

瞬間、私は立ち止まる。

まるで『全てを見透かしたような』。私はこのような表現は気持ち悪くて用いたくないのだが、この時私は確かに背筋が凍る思いをした。

第六感も超越した感得。当然言葉になど出来る筈もない。言語で語り尽くせるものではない。それは在るものでありながら、決して掴むものではないのだから。ただ背を向けているだけなのに、私は彼女の全てを感じ、そして何も抵抗することが出来なかった。

ただそこに存在し、存在し続ける存在。私はこんなにも完成された人間を初めて見た。

これが——『天庭』の第三位……。

彼女は立ち上がり、ようやく私達と相對する。

タートルネックにジーンズというラフな格好でありながら、彼女に対する所感は変わることはない。

「やあ、その君は初めましてだね、霧江常夜さん。ボクは寿蓮華^{ことぶき れんげ}という者だ」

「……何故私の名前を？」

「ん？ そりゃボクは君の兄さんの先輩だからさ。聞いてなかったかな？」

初耳だ。

この私が、こんなことを見落としていたなんて俄に信じがたい事実、眉を顰めざるを得ない。

「ま、君にもまだ限界はあるってことだよ。恥じることはない。寧ろ未だ世界を見渡せることに安堵すべきだ。成長とは恐らく君が思っている以上に大事なもののだよ。発展途上の女の子ほど先行きが楽しめるものはない」

何やら危険な発言が飛び出した気がするが、私はそろそろ間が持ちそうになるので会いコンタクトで杏梨に助け船を求める。

杏梨はすぐさま応じる。彼女はそういうことに長けている。

「お久しぶりです、主任。既にお分かりでしょうが、畚辺ろにかに霧江五樹が拉致されました。今は安全圏ですが、『those』の上層が動いたら窮鼠に陥ることをまだ彼女は分かっています。そういうわけで貴女に力を貸してもらいたい」

「おいおい、おいおいおいおいえらく他人行儀だな、杏梨。半年会っていないだけだと言うのに。前みたいに『しゅにいん、頭なでなでしてくださあい』って甘えてきてもいいんだぞ」

「貴女に一度たりともそんな妄言を吐いた覚えはありません」

「……………」

「言っていないって。そんな目するの止めて」

なんか物凄い扱いにくそうな人だということだけは分かった。これなのだろうか、杏梨が性格に難ありとか言ってたのは。

しかし今の私は茶番に付き合ってられるだけの余裕はない。敢えて毅然とした態度で臨む。私にはそれくらいしか出来ない。

「で——手伝ってくれるの？　そう杏梨が言うから私達ここまで来

ただけど」

「おっと、なかなか気丈なお嬢さんだな。霧江の眷属なだけある。ボクを前にしてその態度、それだけで賞賛に値するね」

「答えは？」

「まあそう焦るな」

そう言つて、寿蓮華は私の前まで歩を進める。

そして眺める。私を。品定めするように。舐め回すように。『私が何』であるかを見透かすように。

やはり彼女も……『知つて』いるのか。

これだけ完成された存在ならば……不思議ではない。

一秒、二秒、——それ以上？

「……ふうん、まあいいだろう。丁度幻や松久のやつてることには付いてけなくなつてたところだ。幻は幻だと何故分からん。……ここで一つ、第三勢力を築くのも悪くないかもしれないな」

「兄さんを、助けてくれるの？」

「ん？ 君ら、それを嘆願するために来たんだろう？ ボクはこれでも年下の女の子の頼みは断つたことはないんだ」

また本当なのか嘘なのか分からない、飄々とした言動を見せ、茶髪のロングヘアーをかき上げながら視線を杏梨に移す。

「杏梨、これでいいんだな？」

「はい。お願いします」

「よろしい」

そう言つて寿蓮華は薄く笑みを浮かべる。

「やはり退屈は世界の敵だな。恐らく上層の位に居る者は誰もが思っていることだろう」

大仰な身振りで、教会の扉を両手で開け放つ。

視界が飛び込んでくる。そしてそれは今から私が身を投げ打つ世界だ。

「行こうか。ボクも参戦する理由が出来た」

その39 追隨

追隨 12 / 6 i ?

打ちつばなしのコンクリート。

無機質。冷たさ。廃れ、土に還り、虚ろ。私も同じ。それも同じ。
月明かり。

寒風。

視線の先には対象があるだけ。

風が、強い。

ただ監視が今の私の役目。

「……………」

ああ、ノイズが心地良い。

ザ——ザ——ザ——ザ——ザ——

ザ——ザ——ザ——ザ——……………

ザ——ザ——ザ——

ザーザーザー――――ザーザー――

ザーザーザーザーザー――――――

………ツ………の途中ですがニュース速報をお伝え
します。

今日午後八時半頃、―――の二十二階建てのマンション、『ヒ
ルデガルト』にて爆発らしき爆音と共に火災が発生し、マンション
は半壊、火災は現在も衰える様子はなく急ピッチで消火活動が続け
られている模様です。現時点で入ってきている情報によりますと、
死者三十二名、負傷者七十七名であり、―――署では遺体の身元
確認を急いでいます。被害者の殆どはマンション周辺で被害を受け
ており、まだ大勢の住人がマンション内に取り残されているとのこ
とで、消防による救助活動が現在でも続いています。マンションは
―――駅の最寄りに位置しており、現時点で判明している被害者の
多くが帰宅途中の―――

「―――誰」

ラジオに耳を傾けつつ、椿彪つばき へうは自分を見据える視線の主へと言

放つ。

視線を投げかける行為は、姿を現すのと同義である。現に彪は相手の気配を完全に捉えていた。

それにここは切り離された空間だ。故に声を投げかけた相手に手加減は不要。そもそも自分に関係していい人物は睺辺幻と氏咲松久だけだ。彼ら以外のコンタクトは無意識の内に拒否しているし、その境界線が無粋にも乗り越えてきた者達には等しく死を与えてきた。当然ながら今回も例外ではない。存在を確認し次第排除にかかる予定であった。

一切の感情もなく、一切の情動もなく、一切の意識もなく——そして一切の理由もなく、彪はこの瞬間殺意だけを全神経に行き渡らせる。

私の世界は私のものだ。邪魔などさせない。

反応は——果たしてあった。

「こんばんは。良い夜ね」

声がした。高い声。幼い女の声。——嫌いな声だ。虫唾が走る。だから——ああ、殺そう。

方向。声量。座標確認。誤差修正完了。

彪は腕を伸ばす。認識したのなら、『掴む』のは容易い。この場の支配権は徹頭徹尾、彪が握っている。

イメージ。狙いは首元。そのまま握り潰すのが望ましい。何にせよ、一部分でも支配下においた時点で百通り以上の破壊方法が既に動き出している。

だが——

「……………？」

——感触はない。

風が吹き抜ける。

感情は勿論表に出さない。しかし、自分という存在から滲み出る『色』はそうそう隠せるものではない。ましてやそれが、今対峙しているような相手ならば。

「乱暴なのね。初対面なんだから、挨拶くらいさせてくれないかしら？」

静寂を打ち砕くのはヒールから発せられる足音。暗闇から炙り出たように、彪の前には少女が立っていた。

赤と黒のドレスを身に纏い、黒く長い髪を大きなリボンで両脇に結えているその少女は、妖しく微笑む。

当然彪は無表情で返す。既に戦闘は開始している。

「改めてこんばんは、『天庭』の狗さん。私は紫子^{ゆかりこ}。二人で一人の紫子。突然で申し訳ないんだけど、貴女私に殺されるみたいよ」

穏やかだった瞳が紅に染まり、大きく見開かれる。

「ッ！」

彪は決して油断していなかった。しかし、彼女には決定的にまだ場数は踏んでいなかった。そのため、敵を無力化するために敵を確認し続けるという愚行を犯してしまった。

それでも、『天庭』随一の反応速度を以てして、彪は紫子に詰め寄る。即断即殺。両者の間は五メートル強であったが、手段を問わず殺しきるためなら彪にとってその程度の距離は無に等しい。

身体中に三十三忍ばせている刃物。その中で右腕内側のそれを出現させる。

回り込み、首を絞め上げると共に刃物を滑らせる。それで絶命。

それで終わり。

だが、

「う……ッ!!」

首に違和感。寸でのところで動作を止める。

その隙を見逃さず、紫子は彪の拘束から逃れる。

「あら、首がどうかしたかしら？」

嘲るような口調と共に、紫子はどこからともなく身の丈程ある鋸を取り出す。

馬鹿げた大きさのそれに彪が瞠目すると同時、紫子はその鋸を振り上げ、片方の腕を落とす。

瞬間、彪の右肘に想像を絶する激痛が襲った。

「ッッッ!!」

「アーーーーッハッハッハッ!! どう!? 痛い!? ならこれは!?!」

だらしなく口角を上げながら、今度は本当に彪の右腕を切り落とさんと血飛沫を撒き散らしながら紫子が跳躍する。

腕を抑え悶絶する彪。

確かに自分は斬られた。それは明らかに次元干渉だった。『どこか』で確かに自分は斬られたのだ。『those』が相手であるならば、このくらいの攻撃は予想しておくべきであった。

彪は考える。考えるだけならば、時間を無限に伸ばすことが出来る。

そして結論付ける。普遍時間に換算して、一秒もかからない判断。

「――あら」

重力に任せて振り下ろした鋸は、コンクリートに深い傷を残しただけで沈黙した。

紫子は眼を瞬かせる。

消えた。――いや、見えなくなった、と言った方が正確か。

反撃は――こない。今のここは、人の温もりが微塵も残っていない廃墟独特の月明かりに浮かぶ埃のような切なさが渦巻いているだけだった。

「……………ホントに逃げたみたいね。全く、もうちょっと遊んでくれてもよかったのに」

紫子は鋸を無造作に放り投げ、靡く髪を押さえながら虚空に目を向ける。

「桜子^{さくらこ}。どうする？」

「……………当初の目的を忘れないで。彼女を殺すのは後。早く『天庭』の0132支部を潰す活動に戻りなさい」

「ふふっ、真面目ね、桜子は」

夜は更ける。

そして日付が変わる。

動き出すものは、これを期に動き出す。

その40 猛追

猛追 12 / 6 i ?

眼下には炎。それは決して消えることはない。自然に発生したものとは違い、意図的に発せられた炎は燃え尽きることはない。違いは些細なことで、意思が有るか無いかの違い。

火は元々生物に対して畏怖を想起させるものであり、そのもの自体が既に原始本能に刷り込まれた『意味』としての役割を持っている。

だが、俺は美しいとは思わない。

かつて何もかもを奪い去ったものに対しては。

「いつまでこんな不毛なことを続けるつもりだ？」

不毛なこと。それは俺が一番嫌うことだ。掘った穴を埋める作業を延々と続けるように、そこに実が結ばれることは永劫ない。

俺は今しがた火の海に沈ませた叉迦己被へと向かって、憐みを込めて宣言する。

可哀想だ、と思う。この程度でしか攻撃の術を持たないことに。そして呆れる。未だにアレらの居場所を突き止めることが出来ない己自身に。だからこのような不毛なことを続けざるを得ないのだ。

「分かっているだろうが。俺とお前の溝の深さを。十年前何度殺されたのか、もう忘れたのか？ たかが階層を数段下げたところで、俺の深みまで立ち入れるとでも思ったか」

すると、不意に両足に違和感。見ると赤黒く燃え盛る無数の縄が、脚の根元にまで絡みついていた。

鉄さえ溶かす高温に、皮膚が溶け、血液が蒸発し、骨まで焦がす。そう。常人ならば。

「俺は『遊び』を好むが。『戯れ』は好きじゃない」

縄を手に取り容易く引き千切り、俺は行動を開始する。

不本意ではあるが、ここら一帯の生命活動を全停止する案を最優先事項に置く。あくまで俺が望んでいるのは同胞の平穏だ。正直言つて『この』世界の人間には殆ど興味が無い。

炎縄を自分の支配下に置き、一振り。それだけで地上では大規模な爆破が起こり、爆風は数十メートル離れたこの上空にまで届く。

同時、又迦己袂が眼前に姿を現す。その様子だと、もう転生した回数は両の手の指に余るだろうか。

「よう、楽しんでるか？」

両腕に焰を纏わせて、神経を逆撫でする声を上げる。

「その形でまだほざくか。俺は今機嫌が悪い。用件だけ言え」

「ん？ んー？ お前アレか。俺が標的なら関係無い人まで巻き込むなっつーアレか？」

「勘違いするな。そう思っているのなら、お前は無能だ。俺に余裕があるうちに質問に答えろ」

「つねえな。こうして俺がお前に吹っ掛けてるんだ。行為から読み取るくらい、お前には容易いだろう？」

「そういう意味じゃない。俺が苛ついているのは他でもない『現状』

だ」

又迦己祓が現れた。つまりは少なくともあの三人以外は全員出払ったと考えるべきだろう。

月見坂愛。

円上神威。

皇周。

あの三人は別格だ。この次元に具象化するだけで、気配に気付かないわけがない。だが、異変は各地で起こっている。今この場でも、少なくとも三桁の人間が死んでいるだろう。ならば、もう変化は起こってしまい、秩序は乱されたと考えるしかない。

「……………」

幻。アイツは今何を考えているだろうか。

アイツの側には俺が居てやらないと駄目だ。あの日以来、『彼女』を失い狂人になったあの日以来、幻には己を制御させる人間が必要不可欠なのだから。

それは『先』の戦いで常に隣にいた、俺にしか出来ないことだ。そして、『今何が起こっているか』。単純明白だ。だから俺は次の行動に移す。

「月見坂は何処だ」

「それは俺の口からは言えねえな」

そうか。それならば。

行動分岐は定められた。

「そうか。うるさい。ああ、『うるさい』な。お前にはもう飽きた」

まだ話を通じる相手だとは思っていたが、そろそろ時間切れだ。以前とは勝手が違う。今回は時間制限というものがあるのだ。

それに、『those』を壊滅させるだけではない。それよりも重要なやるべきことが、この混乱に乗じてやるべきことが、俺達には残っている。

——『天』の遺産、霧江五樹の捕獲が。

そのためには、少し立ち止まりすぎたようだ。

「εκκ? νηση」

全てを包括する『円』が、俺を中心として空中に顕現する。『円』と言う表現ながら、それは『円』に非ず。言うなれば『球』。もしくは『たゆたうもの』。便宜上三次元で空間を支配できるこの世界において、全てを包み込む絶対の法則。

だが、広範囲であればある程威力は落ちる。俺はそれを、注意を払いながら、しかし瞬時の内に収縮させる。あのように言っても、俺は無差別に人を殺す趣味はない。

範囲内に又迦己被を確認。

この時点で既に俺は捕らえている。形而上にあった『円』を形而下に降ろす。この時点で術式は完全に施行される。故に対象にも把握させられてしまうが、人間が空気を掴むことなど出来ようか。

「チッ！ クソがッ!!」

ここに来てようやく異変に気付いた又迦己被が、俺に向かって突進してくる。

「Η ζω? και ο θ? νατο? ? ρχοventail
εξ? σου」

だが彼は俺に到達することは叶わない。無限の距離を走破するには、無限の速さを以て無限の時間が必要だ。彼には、まだその域に達していないのだから。

区域が限定されているという制限があるものの、世界を支配するということはこういうことだ。

そして真の強者は、自分より力の強い者と出会った瞬間に見極める力を持つ者であることを、彼は知らなかったただけの話。

「ハアアツ！」

だが、存外又迦己被も『やる』方であつた。

式を碎き、俺の元へと到達する。

互いの距離が零になる。

これには少し俺も驚いた。

全身から火の粉を迸らせ、巨大な鋏のようなものを具現化させる。

狙いは軌道から察するに俺の五体を繋いでいる間接。単純。あま

りにも単純。

「大鉢特摩・金剛嘴蜂！」

それでも、俺には届かない。あらゆる意味合いにおいて。

「τ α π ? ν τ α σ υ γ κ λ ? ν ο υ ν」

光。

砕け散つたものが、更に砕け散り、凝縮された光が瞬く間に『円』内を埋め尽くす。

閃光があちらこちらで炸裂し、ついには収斂された光は爆発を起こす。

否、爆発という表現では生ぬるい、消滅が形を為して狂奔したような現象が辺りを駆け巡る。

「……………」

数秒後。そこあるのは、一般的な夜の静けさ。何事もなかったかのように、月光が繁華街を照らす。

火は既に消し止められていた。と言うよりかは、アイツがいなくなっただけで火に付随していた不滅性がかき消されたからだろう。ただの火はただの水に負ける。道理だ。

「さて……………」

ひとまず幻の元に行くのが先決だ。又迦己祓の生死の確認はアイツらに任せておくとしよう。どうせカウンターでアレを食らってすぐに動ける筈がない。

俺は携帯を取り出す。

「……………俺だ。少し用を頼みたいんだが……………」

……………何？ 彪が？ ………………」

……………そうか。そういうやり方か。……………分かつ……………」

た、なら二時間後に……………」

俺は耳から携帯を離す。

俺は携帯を握り潰す。

俺は握り潰した携帯を放り投げる。

「何だ。結構やれるんじゃないか」

かくして『天庭』と『those』は第二次抗争を迎える。

そして『彼ら』は――

その41 真言

真言 12/6 i?

夜が明ける。

彼女は言った。

八万六千四百秒程度に拘るようでは何物も救えない、と。

やはり寿蓮華という女は変わっていた。例えるなら、車に乗り込む時、助手席側のドアから入らないと気が済まない程度に。

「そう言えば寿さんってシスターなんですか？」

かつての上司だと言うのに杏梨が寿さんに事務的なこと以外全く喋らないので、重苦しい空気に耐えかね私は口火を切った。

寿さんは一度私を見て、考える仕草を見せ、もう一度私を見た。

その『見る』行為にさえ、強制的に意味を感じさせる彼女は、やはりただ者ではない様子が感じ取れる。

さつきからきつちり一分に一回足を組み替えながら、まず「ふむ」と一言そつと添えてから、話し始める。

「ボクがクリスチャンに見えるかい？」

私は三秒考える。

「おそらくそれは私が決めていいことじゃないです」

「『私が』？」

「ええ。あまり先入観を持たないような生き方を選んできたので」

そうすることで得することもあったし。損することもあった。生
きるとはそういったことでもある。

「…………ふつ。やはり兄妹か。君はお兄さんによく似ている。あ、
それと『寿さん』なんて他人行儀な呼び方は止めないかな。ボクは
出会う者皆に、親愛の情を込めて『蓮華』と呼ぶようお願いしてい
るのだけれどね」

「あ…………でもやっぱり」

私がそこまで言ったところで寿さんは——いや、もう止そう——
蓮華は言葉をかぶせる。

「ボクが君より年上だから、かい？ そんなこと気にする必要はな
い。ボクは崇められることには慣れていないんだ。それに、名前と
いう記号は本来そのまま用いられるべきなんだ。これを素直に受け
入れられないのが人間の悲しい性だね。だから『こんな』世界が出
来上がってしまう」

その発言を聞いて、私はほぼ確信する。

多分、この人もまた『ズレている』のだろうと。もしくは、俯瞰
する存在なのだ。言うだけなら誰にでも出来る。そんないい加減な
者との違いは、絶対的な意思が、求道が介在しているか否だ。

「それと、君の質問に答えよう。ボクがシスターをやっているのは、
多分君が思っている通り戯れだよ。そしてクリスチャンでもある。

もしかしたらクリスチャンでないかもしれない。それはボク自身が預かり知るところじゃない。分かるね？」

「ええ」

「だけど、ボクがボクの状態を保つのはああいった環境が最適なんだ。何と云うか、浮世離れしているような環境がね、今のボクには必要なんだ。不可欠と言ってもいい。去年は京都で巫女やってたし」

「その前はチベットで二年くらい音信不通でしたね。そしてその前は南極うろついてたそうですが。そんなのだから『天庭』でもよく分からない位置付けなんですよ」

そこでぼつりと杏梨が愚痴みたいなのを零す。どうも彼女も苦勞していたようだった。それにしてもその断片を聞くだけで、相当の変人だという確証がどんどん形作られていく。

「んー？ 杏梨にしては正論を吐くね。でも大体ボクが地位なんかどうでもいいことは、君がボクの下に就いた時から分かっているだろう？ 上司の役目は部下の育成だ。その時点でボクが直接君に手を下すことなんて殆どないよ」

「……^{あすか}亜須香はどんな感じで？」

「ああ、君には相当劣るけれど、まあそれなりにやってくれてるよ。毎日愚痴つてるって聞いているけどね。ふふっ、君も人が悪いなあ。まだ未熟な後輩に仕事全部押しつけてトンスラするなんて」

杏梨の眉が数ミリ動く。結構な感情の変化だ。そこまで杏梨を突き動かす人間を、私は私以外に知らない。

……少し嫉妬する。私は自分自身を律している自覚がある。だからこそ、私は私を冷静に判断し、冷静に吟味し、冷静に咀嚼し、冷静に思考することが出来るのだ。

「私の真意を知っていながらそういうことを言うのなら……怒りますよ？」

「もう怒ってるじゃないか」

「主任」

「はいはい」

蓮華は杏梨から逃げるようにして視線を逸らし、肩を竦めて私へと向き直る。

「そう言うわけで、全てを極め終わったボクにとって、全ては『遊び』なわけさ。今は世界の残滓集め、と言ったところかな。機会があれば君も実践してみるといい。お勧めはしないがね。結構苦痛なものだよ、全てを俯瞰してしまう位置に身を置いしまうってのは」

「でも……貴女は人間なんですよね」

「ああ。ボクは徹頭徹尾人間だよ。首を絞められれば死ぬし、心臓を突かれれば死ぬし、頭を吹っ飛ばされても死ぬし、水の中では呼吸が出来ず死ぬ。——あくまで理論上の話だけれどね。それでも君らよりはよっぽど不完全な存在さ」

「だけど——」

言い淀む私に、蓮華はそつと微笑む。

——こんな、表情も出来るのか。

「陳腐な言葉になるけど、今自分が出来ることをやることだ。その行為は、それだけで何もかもを凌駕する動力になり得る。無量大数の能力を持っていたても、意志がなければたった一本の強い意志にも劣る。ボクはかつて、そういった光景を目の当たりにしたことがあるんでね」

蓮華はそう言って、紫煙を吐き出す。

いつから彼女は煙草を吸っていたのだろう。

「もう少し自信を持つとか、常夜君。君はまだ、自らを律しすぎて
いるくらいが見えるよ」

蓮華は私を見る。

杏梨は私を見る。

私は——

その42 瓦解

瓦解 12/7

時間は伸びたり縮んだりする。少なくともこの場においては。

「ぼくはいつまでここに居ればいいのかな」

二日が過ぎた。事態は変わらない。どうやら出来事はぼくの外側で起きているようだ。確証は持てずとも予感することは出来る。ぼくは何も変わらないことに対して、生まれて初めて恐怖した。

それは本当に『何も』なのだ。空気が停滞すれば息苦しくもなる。しかし、ぼくの前の少女はいつだって変化している。

「不安かい？」

「……………分からない。だけど何か奇妙なんだ。例えるなら、目の前で爆発が起きている『はず』なのに、その音が、感触が、影響が全く僕の方へ向かっていないかのよう」

畠辺は満足そうに頷く。

ぼくは混乱する。

「よく解ってるじゃないか。君の言う通りだよ。……………でも、そろそろ限界かもね。同士討ちを狙って漁夫の利を得ようと思っていだけれど、どうやらそれ以前の問題を忘れていたようだ」

畠辺が明後日の方向を見る。そこには時計があるだけだ。時計があるだけ。時計が時計が時計が時計が――

「何——」

そして、『突然』は訪れる。

瞬間、空間は膨張する。そして、胎動を始めるように蠢きだす。地震とはまた違った振動が部屋を襲う。だが部屋の家具や装飾品は倒れていない。だけど、揺れている。どういうわけか。

ぼくは立っていらなくなり、その場で膝をつく。

「ろにか様！」

ヴァネッサが叫ぶ。それもすぐに歪みの中へとかき消されていく。敵か味方か。そもそも今のぼくにはそんな判断がつくはずもない。ぼくはまだ何も知らないのだ。何を以て味方と為し、何を以て敵と為すか。

ぼくは無意識の内に睨辺を視界の中に収めようとした。何故？
そうすることが大切だと思ったから。

ざわめき立つ心中を抑えながら、激流が過ぎ去るのをそっと待つ。

「……………」

振動が止む。——大丈夫だ。どこも打っていないしどこも切っていない。五体満足のままぼくは立ち上がる。

すると、ドアが開いた。カチャ。ひどく乾いた音だ。睨辺とヴァネッサは部屋にいる。今まさにぼくが目視している。すると、他の誰か、ということになる。

まだ計り知れぬ何かが進入する。

もう正直何が何やら分からなかった。でも進行しているものは仕様がない。ぼくは唯唯諾諾と従い、身を委ねるしかないのだ。重ね重ね言うことだけねど。

「や。久方ぶりだね、五樹君」

寿蓮華。そして、

「やっと捕まえたよ、兄さん」

常夜。隣に居るのは……誰だ？　と言つか……

「お前……何でここ……」

「——疾イツ」

永遠とも言える一瞬を破壊したのは、ヴァネッサだった。

とん、と軽いステップの後、弾むようにして躍進。

疾走しながらエプロンドレスの中に両手をつ突っ込んだかと思うと、両太股に括りつけてあったガンホルダーからその手に余るハンドガンを素早く手にする。

まず身を寄せたのは、常夜の隣に居る少女。

身体全体で押し切るように密接したかと思えば、銃口を顎下と胸元に押し当てた。

躊躇など、微塵もあるわけではない。

「——」

腹の底に響く筒音の二重奏。一息遅れて血が飛び散る。とても血が飛び散る。滂沱の如く、血の玉が舞う。

誰も動かない。この時時間が流れているのか、ぼくは確証が持てなかった。

そしてぼくも動かない。動ける筈がない。もし動けたところで、何が出来ようか。

目の前で起こったことを理解どころか認識するよりも早く、銃声の残響が消え去るよりも早く、ヴァネッサは次の行動に移る。

彼女が次に向き合ったのは、常夜。ぼくの妹。

ヴァネッサは、ぼくの妹に、銃を向けた。

「あ」

銃口を向けた。

え。

銃口。

血。

連想。

血……？

死？

止。

「止——」

「杏梨」

俺が声にならない叫びを上げたかと思ったその時、常夜の声が聞こえた気がした。

こんな短い時間の中で、彼女の冷静な声がこんなにもはっきり聞き取れる筈はない。

そして。

「ああ——ホント最悪ね。こんな醜態晒すなんて」

そこからは一気だった。

下顎から頭を吹っ飛ばされたと思ったその少女——杏梨は、何事もなかったかのように『吹っ飛ばされる前』の姿で、今まさにトリガーを引こうとしていたヴァネッサを素早く組み伏せる。

「っ!？　ぐぎゅ!？」

地面に顔面を強かに打ちつけ、なかなか可愛らしい声を上げながら横倒しになるヴァネッサに、杏梨はヴァネッサの手から離れたハンドガンを手取る。そして流れるような動作でまだ硝煙が上る銃口を後頭部へと突きつける。

チャリン、と薬莢が地面に落ちる音。

形勢逆転なのは誰の目から見ても明らかだった。

そして、ぼくはやっと一呼吸することを許される。

「う……ぐぐ……放せ化け物……」

「あら、結構ふてぶてしいのね、貴女。でも嫌いじゃないわ、そういうの」

余裕の態度を見せながら、だが決して杏梨は隙を見せようとしな

い。
茫然とするしかないぼくへと、ここで初めて声かけられる。

「兄さん、ちょっとどういいうことが説明してほしいんだけど」

「え、いや、ぼくじゃなくて畚辺が……」

「無粋だなあ、五樹は。私と暮らしていたのに別の女を呼び込むだなんて」

「えっ」

刹那、常夜が目にも止まらぬ速さで、ぼくの首根っこ目がけて両手を繰り出してきた。

その43 何処 壺

何処 XX / XX 壺

気付けば力を持っていた。それ以前の記憶はない。記憶とは得てしてそういうものだ。

力は魔力である。力は支配する。決して力は支配されるものではない。そこには意思が介在し、こちらが隙を見せると呑み込まれる危険性を孕んでいる。

時代はいつだって『力』が動かしてきた。

月見坂愛はその力を有効に使う術を持っていた。

そして今、愛は 世界 を統べる存在となっていた。

「……………出来上がりつつ、あるか」

戦況は上々。何事も始めが肝心である。始め良ければすべて良し、という言葉にもあるように。

玉座に身を置く愛は、見た目にそぐわぬ老獪めいた仕草で目を閉じる。

だがまだ油断は出来ない。前回致命傷を与えたのはこちらだが、全滅にまで至らせていないのもまた確かなのだから。

『天庭』。愛率いる『those』に楯突く唯一の存在。

「——くつつつ……面白い」

そしてあの一族。当初は簡単に手中に収め得ると思っていたが、なかなかどうして上手くいかない。それは愛にとって虚構めいたものであり、同時に充溢を感じさせた。

運命が、そうさせているのか。

……運命？

「運命」

口に出して『調べ』とする。成程良い言葉だ。そして、忌々しくもある。こんな言葉は他にない。

完璧であるからこそ、こう思ってしまう。完璧は完全ではないのだ。

……本当にそうなのだろうか。それを今から確かめに行くのだ。その時。

無から有が生じた。

どこからともなく流れ出た有は、創造を経て形を成し、活動に至る。

色を成し、音を成し、そこにあるがまま表す。

瞬きと瞬きの間に。

「——遅かったのう、周^{あまね}」

愛が呟くと、それに呼応するように一人の女性が目の前に現れる。絵画からそのまま出てきたような豪華なドレスを着飾り、銀髪を大胆に後ろに結わえた、周と呼ばれた女性は、愛よりも十歳ほど離れて見える。勿論年上という意味で。

周は手にしている洋扇を振るい、一人掛けのソファアーを出現させ、深々と座る。

二人は十年ぶりに相対した。

「久方振りね、愛。息災のようで安心したわ」

「其方もな。なかなか洒落た着物じゃのう」

「そう言う貴女も素敵よ。だからこそ私は貴女についていける」

「それは重畳」

正直神威との会話は堅苦しかったので、こうして奔放に対話してくれる相手を前に、愛は確かに久しぶりの悦に入っていた。

「そう言えばメンバーが増えたみたいね。まさか私の上に一人入るなんて考えてもいなかったわ」

「何、其方にかけている期待は今まで通りじゃ。『彼』は些かイレギュラー……いや、ジョーカーとも言っている。だから当分の間は表には出んよ」

「ふうん……まあいいわ。ひとまず私達の新たな同胞に乾杯しましよっ」

周はワインが注がれたグラスを、しなやかな手つきで呷る。今この瞬間まで洋扇を持っていた手で。いつしか愛の手にもグラスがあった。彼女も周に倣って一息に呷る。

現し、消す。至極簡単であり、極限。そこに至るには人間では不可能。

何故なら彼女は魔女なのだから。

「さて、私を呼び出したのだから、それなりの『わけ』があるってことよね」

「用も無いのに其方と呼んではいかんのか？」

周はチャシャ猫のように笑う。遊具で戯れることを覚えた幼児のように笑う。

「いいえ。寧ろその方が大歓迎だわ。私は気紛れでやるのが大好きなの」

「そう言うと思うたわ」

二人はひとしきり笑い合う。そうすることが、二人における最たるコミュニケーションなのだ。

「とりあえず今総出で『天庭』の巣を洗っているのだが……」

「ええ、分かっているわ。私がするのは、『それ』じゃない」

「其方の扱い方はもう心得ておるわ」

彼女との付き合いは短く、長い。何でも知っているが、何も知らない。その関係は常にベストを保っている。

「なら大体分かっておろうな」

「『大体』ね」

そして愛は告げる。

「霧江五樹。彼の身柄を確保せよ。決して『天庭』との争奪には負けてはならぬ」

周はうつとりした表情で言う。

そしてもう一度出現させたワインを嚙下する。

「そういうのって、とても素敵だわ」

斯くして『those』序列第四位、すめらぎ あまね皇周は十年振りに行動を開始することになる。

その43 何処 式

何処 XX / XX 式

やけに冷え込むと思い、遮光カーテンを開けると雪が降っているようだった。部屋の中は電気ストーブをつけているせいもありそれなりに温かいので、窓は小さな水滴無数に付いてかなり曇っている手で二三度窓を擦ると、少し視界が開けた。吹雪いている、というほどではないが、普通に歩いているとそれなりに視界が悪くなる程度には降っている。この辺りで雪が降るのは珍しくもないが、定期的に平年より少し早目であることは確かだ。それでも積もりはしない。畚辺幻の記憶で、この地域で少なくとも地面が見えなくなるほど雪が積もったのは十年前だ。

そう。十年前。

『何もかも』の契機。

無数にある終着点であり、開始点の一つ。

これを期に、全ては変わった。変わり切ってしまった。そして、変わらなかったものはない。万物は流転すると言うが、その背後にある真理でさえも例外ではなかった。世界の軸がずれ、理である基盤は大きく揺らいだ。修復は可能であったが、元に戻すことは既に『起こってしまった』時に不可能であると直感した。事実、それは無駄な試みだったのだ。

空気が籠っている。幻はベランダに繋がるガラス戸を開ける。風はなかったが、空気も暖かさを求めているかのように部屋の中へと逃げ込んできて、部屋の温度が一秒と経たずにぐんと下がった気がした。

幻は息を吐く。白い息だ。冬に対しては好きだとか嫌いだとか、そういった感情を持たないが、このように呼吸をしているのが視覚化されるので、何となく気に入っている。そうして、自分はまだ生

きていると自覚する。自分はまだ何かを出来る存在であることを認識する。当たり前のことだが、当たり前のことを当たり前であると享受し、更にそれを特別なことであると昇華することは難しい。だが、その行為は生きていく上で大切なことだ。少なくとも幻にとっては。そして、それに甚く共感してくれた松久も。

「……………」

先程『天庭』の拠点が次々と襲撃を受けたという報せがあった。そうか、と幻は一言だけ返した。そうだ、と松久は応えた。それだけで彼は俺の代わりに取り次いでくれる。だから彼だけには幻は隣に居させることを許した。

しかし、幻にとつては本当に「そうか」の一言で済ませる程度のものでしかなかった。所詮あれも遊びなのだ。或いは、衝動。人は何かをせずにはいられない。人は立ち止まることを許されてはいない。停滞しているように見えて、人は常に歩みを強いられている。だから幻は『天庭』を創った。そうでもしないと、自分一人ではどうしようもなかったから。何かをせずにはいられない衝動を、一人で抑えることが出来そうになかったから。

畚辺幻は究極的に人外でありながら、徹底的に人間であつた。そして、そのことを認めざるを得なかった瞬間、彼は気が触れた。

「……………」

ここまで表立った動きを見せてきたのは予想外であつたが、あの女ならやりかねない。と言うよりも、あの女の行動予測を立てることなど不可能なのだ。だから幻は考えるのを止めた。『天庭』の管理は元より松久に一任している。幻にとつてこの先行すべきことは決まっている。それは今日があれば明日があるような、普遍的な意味合いで。

先の大戦で、端的に言うならば幻は負けた。だが、屈してはいなかった。ここで屈するようであれば、『その次』の戦いの舞台にすら上れない。それくらいの気概はまだ幻にはあった。

そのために、まずあの三人と『一人』を叩く。おそらく松久と蓮華、そして杏梨——既に今は所属していないが——以外では、あの常軌を逸し切った化け物共と対峙する術すら持たないだろう。ならばよし。全て自分が相手取ってやればいいだけのこと。幸い十年も経てば傷は癒え、力も最盛期の半分まで回復した。『あの』程度の雑魚、『この』程度の力があれば十分にも余りある。

「——あと、二週間か」

それは節目の日でもあった。だからこそ、幻はその日を選ぶ。そうすることで、百八十度変わったものが、すっかりまた回転して元通りになると信じているから。

そして祝福される。

あの輝かしく穏やかなで満ち足りた日々を、また抱きしめることが出来るのだ。

ああ愛しい俺の女。
あめなきしき、
色無天。
かろに辺眈——否、

俺は必ず取り戻してみせる。例え、もう一度世界を滅ぼすことになるうとも。

物語は更なるうねりを伴って進行する。
狂気と狂想と狂乱を孕んで。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5380w/>

畠辺ろにかは生きることにした

2011年12月4日14時55分発行